
キカイ探偵久遠虎次郎

怪昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キカイ探偵久遠虎次郎

【Nコード】

N5116W

【作者名】

怪昴

【あらすじ】

幽霊、宇宙人、超常現象、超能力、魔術、呪い、未確認生物^{UMA}、超古代文明の遺産等々……この世にはびこる様々な『キカイ』に探偵久遠虎次郎挑む！——かもしれないし挑まないかもしれない。キカイ探偵、ここに参上。

○一話完結型の物語群です。ジャンルは便宜上「推理」としましたがあんまり推理しません。気楽にどうぞ。

※同作品は「ノベリスト.jp」サイトにも掲載されています。

怪ノ一 『キカイ探偵』

零 『探偵登場』

『奇怪な事件をお待ちしております。久遠探偵社 03―XXXX―XXXX』

書かれた電話番号に掛けると甲高い女の子の声がした。

「はい！ こちら久遠探偵社です」

まさかこの女の子が久遠探偵なのだろうか。そう疑い訊くと、受話器の向こうで高い声はクスクスと笑った。

「残念ですけど違います。時々そうだったらいいなーと思いますけど、でもわたしは先生ではないのです」

何を言っているのかよくわからなかったが、とりあえずは彼女は久遠氏ではないようだった。確信はないが、先方は事務員だか受付だかだと判断して、依頼がある旨、約束を取り付けたい旨を伝えた。するとやはり事務員（だか受付だか）の女の子は含みがあるように笑い、カラカラと明るい声でこう続けた。

「はい。わかりましたー。ご依頼ですね。そしたらいつでも好きな時に事務所の方にいらしてください」

いつでも好きな時に？ 先方の都合はないのだろうか？ 「いつでも」と言う、極端な話深夜や早朝でも良いのか？

聞くと、こんな答えが帰ってきた。

「はい。いつでもいいですよー。先生はいつでも暇ですから。全日本暇選手権の王者ですもん」
チャンピオン

そして〈私〉は『久遠探偵社』と書かれた扉の前にいた。

古ぼけた木製の扉は、表面に塗られたニスがすっかり剥がれおちて、ところどころささくれだつてすらおり、もはや廃墟の中の扉の様な体をしていた。ノックをすれば、そのまま扉に穴が空くのではないかといらぬ心配すらした。

しかし幸いなことに、ノックをしても扉は壊れなかった。

ただ鈍い、なんとなく陰鬱になるような音だけがとつとつと響いた。

「はい！」

と、不意に扉の向こうから、ノックの音とは正反対に明るい声が飛びだしてきた。電話で話した女の子の声だった。

「どうぞお入りください！」

〈私〉は錆びついた金属製のドアノブを握ると、それをゆっくりと引き開けた。

キィー、つとでも表現するような、錆びついた開閉音になる——ことを想像したが、扉はなんの滞りもなく自然に開いた。

扉の向こう、正面にはまるで大正時代の女学生のような、着物に袴姿の若い十代後半くらいの女の子が、にこにこ笑顔を浮かべて立っていた。

間違いなく美少女と形容されるような、整った目鼻立ちをした少女だったが、その服装も相まって、どこか浮世離れた雰囲気を感じており、それが不気味だった。

女の子はぺこりと〈私〉に一礼すると、電話越しで聞くよりもはるかに澁刺とした様子で、言葉を発した。

「ようこそいらっしゃいました、依頼人様！　どうぞこちらへ。久遠先生がお待ちです」

そして少女は〈私〉から見て向かって右手をすつと示した。

その先には、扉と比べてせいぜい奮発したと思われる木製の机があり、その向こうに一人の青年が腰かけ文庫本を手にした格好で、こちらに無関心のままそこに視線を走らせていた。

まだ年若い青年だった。二十代前半か、下手すると袴姿の女の子

と同世代にすら見えなくもない。

「先生、依頼人様です」

少女が重ねて言い、それでようやく青年——あるいは少年は文庫本を置いて顔を上げた。

彼の読んでいた本は、夢野久作の『ドグラ・マグラ』だった。

青年はまるで人形のような、黒い感情のない瞳していた。

だが感情は実際にはあるようだった。

青年は唇の両端を、ほんの少し吊り上げると、どこかおもしろがるような調子で、言った。

「はじめまして。探偵の久遠虎次郎です。さあ、どうぞお座りください。そして依頼についてお話ししましょう。目も眩むような、そんな『キカイ』な話を期待しますよ」

そして、〈私〉は座った。

一 『目（甲）』

陸に上がって呼吸できずに戸惑う魚。

虎次郎は安物のテーブルを挟んで向かい合う依頼人の男の挙動不審な様子に、そんな表現が頭に浮かんた。

戸田と名乗った依頼人の、痩せぎすり目の周りが落ち窪んだせいで目玉がぎょろりと飛び出して見える様は、控え目に言っただけでも健康体の成人男性のものには思えなかった。その目玉は先ほどからずっとぎょろと動いて部屋中をねめまわしている。口元ではまるでそれが主食であるかのように右手親指の爪をずっと齧り続ける。しわがれたスーツは、仕立てなおせばそれなりの物に『戻り』そうであったが、現状では正直浮浪者の衣服とさえ大差ない。おそらく実年齢は四十代初頭から半ばといった辺りなのだろうが、見た目の印象だけで述べるならば、さながら枯れ果てた老人の様であった。具体的に幾つぐらいの年齢に見えるかと問われると返答に困るが、

強いて言うなれば『これから棺に納められる死体』ぐらいであろうか。

戸田はここに来てからまだ「戸田です」という自己紹介以外の台詞を口にしていない。もちろんそれも『とだです』の四文字の文字列を台詞と見做す場合においてである。虎次郎は助手の烏丸閑子嬢が彼に紅茶の一杯を差し出した後、落ち着いてからゆっくり依頼の内容をお話になってください、とそう彼に告げていた。

しかしそれからしばらくして、内心虎次郎はその申し出は失敗だったかと思うようになっていた。

戸田は丸々一時間近く、まったく落ち着きを見せる様子がなかったからだ。『戸田魚』は未だ地上での呼吸法を発見できないようですとせわしなく、飽きることなく貧乏ゆすりに精を出していた。

探偵はもうそろそろ階下の大家が「うるさい、埃が落ちてくる」と怒鳴りこんでくるのではないかと正直戦々恐々としていた。幽霊、宇宙人、超常現象、超能力、魔術、呪い、未確認生物、超古代文明の遺産等々、あらゆる『キカイ』を歓迎し、そのいずれにも物怖じしないキカイ探偵の虎次郎であったが、そんな彼もまたやはり人の子、恐れるものの一つや二つくらいはある。まず最初に思い浮かぶ物が酢豚に入れられたパイナップルで——どうしてあんな物が人の食べ物として浸透しているか虎次郎には甚だ理解できないのだが——そして次に考え至るものがこの事務所の大家だった。虎次郎の思考は、この時点では既に如何にして眉間に皺を寄せた大家の機嫌を取るかに注進していた。そうしてこのままでは埒があかないと判断し、ひとまずこの場をお開きにするため急な用事をでっち——もとい思い出した時だった。

遂に魚介類は陸上での肺呼吸の術を身に付けた。小声で、ぼそぼそと、囁くように、蚊のなくような大きさで、戸田は言葉を発した。以下は小説と物語の性質上、まるでなんの変哲もない会話と取れるだろうが、前述の表現を鑑みて、この依頼人との言葉のやり取りがいかにも難儀なものであったかは、それなりに察して欲しい。

「誰かに後をつけられているのです」

「ほう。誰か、と言いますと？」

「わ、わからないから、こ、こうして相談しています」

戸田は今もなお何者かの目に晒されていることを警戒しているのか、せわしなく眼球を動かし続けていた。とは言え、今この場所では彼をつけ狙う怪しい目がないことは、虎次郎が自信を持って断言できた。この部屋での戸田を見つめる視線は三つだけ、虎次郎のものと、閑子のものと、戸棚の上にある猫の置物ミーちゃんのそれだけである。

「よろしい。では詳しい話をお聞かせください。誰かに後をつけられているとのことですが、具体的にそれはいつ頃からのことですか？」

「だいたい……は、半年程前からだと思います」

「なるほど半年程前。つけられる、と言うのはいつもどういう状況なのでしょうか？」

「は、初めは……会社からの、き、帰宅途中でした」

戸田はその時のことを思い出したのか、ぶるりと一つ大きく身ぶるいをした。

「そ、その頃はちょうど仕事が忙しく連日の残業続きでして……毎日終電帰りが当たり前、その日も自宅近くにまで辿りついたのが深夜十二時を回っておりました。人気のない路地を、今日の仕事もやっと終わったという安堵と、また明日九時から仕事が始まるのだという憂鬱に挟まれた気分の中で……私は……一人、あ、歩いておりました。そ、そんな時です。不意に、私は背後から自分を見つめる視線に、き、気づいてしまったのです」

「ふむ。貴方はどうしてその視線に気づいたのでしょうか？」

「し、視線を感じたからです」

戸田は言った。

「ま、間違いなくそれは私を見つめていたのです。は、背後からじつとりと私の背中を眺めておりました。私は不気味に思いました。」

こんな夜中に、しかも私のような一介のサラリーマンに、視線の主はいったいなんの用事があるのだろう、と。その正体は……き、気になりましたが、私はあえてその場ですぐには振り返りませんでした」

「なぜです？」

「む、向こうはこちらが見られていることに気付いたと気付いていないと考えたからです。な、ならば正体不明の輩の目的を探るためにも、す、少し泳がせておこうと……いや、違います。こんな理由は後付けです。私は恐れていたのです」

「何をです？」

「た、探偵さん。こんなことを言うと、笑われるかもしれませんが、私は幼い頃より、いわゆる靈感と言うものに優れておりました。子供時代から今まで、頻繁に、人に見えぬ物を見て、聞こえぬ物を聞いてきたのです。ですから……つ、つまり、も、もし私を見やるのが、人ならざる物の視線であつたらと想像すると、私は恐ろしくなつてそれを直視しようと言う気になれなかったのです。あ、ああ……皆まで言わないでください。おかしいことを言っているのだということは、自分でもわかっていますから」

「信用しましょう」

虎次郎は薄く口元だけで笑ってみせた。戸田は目を見開いてそんな探偵の様子を見やる。

陸に上がった魚は、初めてみる地上の動植物に目を奪われる。

「戸田さん、この世の中は、そのすべてを理屈で説明出来るとは限らないのです。いずれはすべての真理が白日の下に晒される日が来るのだとしても、今はまだね。ですからぼくは存在するのです。世の理の外側にある『キカイ』なる様々な事象こそが、ぼくの知の領域なのです。『物の怪』や『幽霊』なる言葉を口にしてその良識を疑われるのは、蒙昧なる大衆の闊歩するその扉の向こう側の出来事。どうぞこの場の席では貴方の知る“事実”をそのまま脚色なくお話ください。そうであれば、ぼくもまた常に真摯な態度を持って、

貴方のご期待に沿う様に致しましょう」

「ああ、その言葉、どれほど私を救うことでしょう。今まで私はこんな話をしていつもいつも人に馬鹿な事をと蔑まれてきました。坊主や神主でさえ、私の話をまともに取り合おうとしなかった。探偵さん、貴方はとても良い人だ」

「ありがとうございます。ただぼくはぼくの知る理を話しているだけです。さて、話がやや脱線しましたね。貴方の抱える問題について続きをお話ください。その後貴方を見ていた視線はどうになりましたか？」

虎次郎は戸田の後ろで話を聞いていた閑子が、今にも大笑いしそうになっているのを堪えていることを見て見ぬふりしてそう促した。戸田は、頷くと再び記憶の糸を手繰るようにして自身の体験談の続きを話し始める。

「何者かはその後もずっと一定の距離を保ちながら私の背後についてきました。先程お話したように、その正体が怪異であることを恐れる私は、決して後ろを振り返ってはならぬと自分に言い聞かせながら、何事でもない風を装って家路をぼつぼつと歩き続けました。あの時の嫌な気分は今でも忘れられません。季節は未だ冷え込みの去らぬ初春であったというのに、背中には汗がじつとりと伝い、口の中はカラカラに乾きました。不気味な視線を背後に、私はちよつとした物音にさえ飛びあがらんというような思いでした。その視線は遂には私の住まうアパートにまでついてきました。そうして……そうして玄関の扉を潜った折、ようやく嫌な気配が去ったのです。その時の、私の安堵をどんな言葉で説明しましょう」

「つまり、あなたをつけ狙う何者かは家の中までは追ってこなかったわけですか。その後、先方の何らかの動きはあったのでしょうか？」

「その日は……ありませんでした。し、しかし、本当の恐怖の日々はその日より始まったのです」

戸田はまた少し言葉にどもりを混せて応えた。それはそのまま彼

の体感する恐怖の多寡を示していた。

「何者かは、あ、明くる日より毎日のように私の後をついてくるようになったのです。出勤時や退勤時はもちろん、昼休みにちよつと定食屋に足を伸ばすと、時にも、休日に町を出歩く時にも……私が外を出歩く折、常に怪しい視線は私の行動をじつと観察していました。あれは非常に抜け目がないようで、常に私を見ているにも関わらず、私以外の誰かにそれを悟られることはありませんでした。お、恐ろしかったのは……相手の目的がまったく不明であつたことなのです。視線は常に私の背中を捉えながら……し、しかし決してそれ以上干渉してくることはな、なかった。ただ、徐々にその監視の幅を広げていって……次第にそれは屋内にいる時にも感じるようになる……やがて、や、やがて仕事中や家にいても、観察は続くようになったのです。も、もう私は気が狂いそうだ。……二十四時間一時も気が休まることなく、常に誰かに監視され、……それはひどい恐怖となって、窓にカーテンを掛けて、絶対に見られているはずはないとわかっていてもその事実ですら疑いをかけてしまう。ああ……探偵さん、私は恐いのです。私を監視する何者かが、その思惑も正体も不明なことが、な、何より恐ろしい。い、いつそ幽霊やら何やらであるとはつきりした方がよほど気が楽なくらいだ。こうしている今も……ええ、わかっています。今は視線は感じませんが……それは私が気付いていないだけで、もし存在するのだとしたらと……あの窓の向こうに……何者かの、悪意に満ちた目が――

「あっ！」

「ひいっ!？」

突然背後で大声を上げた閑子にぎょつと身を竦ませて戸田は悲鳴を上げた。その様子を見て虎次郎が連想したものは、まな板の上で頭部を切断された後、痙攣して跳ねまわる魚の胴体であることは言うまでもない。

「……どうかしたのかい、閑子君」

「いえいえ先生」

クスクスと、とびきりの悪戯が成功したかのように――實際そうなのだろうが――無邪気に笑うと、閑子は応えた。

「今日のお夕飯はカレーにしようかと考えていたんですが、ふとそういえばじゃが芋がないことを思い出してしまったのですよ。先生はカレーにじゃが芋がなくても平気ですか？」

「好きにしてくれ」

虎次郎が肩を竦めて応えると、閑子は再び軋るようなクスクス笑いをして見せた。

「そうですか。でもわたしはじゃが芋の入っていないカレーは駄目なんですよ。そんなわけで今夜はカレーは中止です。残念でした」

「全然残念ではないけどね。ところで閑子君。ぼくの部屋から“あれ”をちよつと取ってきてくれないかな」

「“あれ”？ “あれ”ってどれですか？ 丸い“あれ”ですか？

四角い“あれ”ですか？ 三角の“あれ”ですか？ 金の“あれ”ですか？ 銀の“あれ”ですか？ あっ、それともひよつとしてとってもエッチな“あれ”ですか？」

「“あれ”はあれだよ。本当は君も何かわかつているんだろう？ 冗談言っていないで、とにかく取ってきてくれたまえ」

しかしなおも不可解そうに小首を傾げる閑子。ところが唐突に何か思いついたようで、人差し指を一本立てると、「ピコーン」と口を開いた。

「ピコーン？」

「頭の上で豆電球が灯ったのですよ。わかりました先生。それでは至急“あれ”を取ってきます」

「うん、まあ豆電球云々はよくわからないがとにかくそうしてくれ」
そうして事務所の奥にある虎次郎の私室に引っ込んでいく閑子を確認すると、彼は未だ椅子から半分腰をずり落ちさせたまま、心臓のある左胸に両手をあてがった態勢の戸田に向き直った。

「失礼。騒がしい娘でしてね」

「心臓が……止まるかと、思いました……」

「なればそれ程までに貴方の精神は参っているということでしょう。今の閑子君の悪戯は、確かに虚を突きこそすれ、そこまで驚く程の事でもありますまい。しかしご安心を。貴方が虚言を弄することなく事実のみを口にくれたおかげで、ぼくにはすっかり貴方の問題を解決する方法を見てとれることが出来ました」

「そ、そそそれは本当ですか？」

顔に脂汗をびっしりと浮かべて、戸田はずいと前のめりに座り直した。

虎次郎はそんな藁にもすがらんという思いの戸田に、余裕の体で微笑み返して見せる。口元が思わず綻ぶのは、ここに来て『戸田魚』の様子が一層滑稽に見えたからではない。決してない。

「もちろんですとも。世の人々が足を竦ませ、インチキ霊能者達が裸足で逃げ出す怪異も、ぼくにとつては恐るるに足らぬ些事でしかありません。だからこそ、ぼくは『キカイ』探偵であるのです。ほら、こうしている間にも貴方を導く救いの手がこの部屋に到着しました」

「先生、持ってきましたけどこれでいいですか？」

そう言つて虎次郎に白い手拭いに包まれた何か細い物を差し出したのは、もちろん奥の部屋から戻ってきた閑子嬢である。虎次郎は手拭いの包みをそつと解くと、中に一本の小振りな矢が収まっていることを確認して頷いた。

「うん、これでいい。以心伝心といったところか、流石だね」

「当たり前前田のクラッカーです」

「たまに思ふんだけど、君いったい年幾つだい？」

「そ、それは矢……でしょうか？」

戸田が身を乗り出したまま訪ねてくる。その声には、期待と不安が入り混じっていた。

「そうです。見ての通り矢ですが、もちろんただの矢ではありません。この矢で貴方を狙う何者かを貫くのです、などと無茶な事を言う気もありません。良いですか戸田さん。これは破魔矢なのですよ」

「破魔矢……と言いますと魔除けの……？」

「その通りです」

「しかし……魔除けの道具など……今更……私は多くの物を試しましたが結果はどれも芳しいものではありませんでした」

戸田は明らかに落胆したようだった。だが探偵はそんな相手の様子にも余裕の態度を崩さない。

「これは十把一欠片のどこにでもあるような破魔矢ではありません。ここの、羽根の部分をご覧ください」

虎次郎が示した羽根の個所には、奇妙な二つの模様が記されていた。一つは五つの角を持つ一筆書きで記された星型の文様——いわゆる五芒星の形をしており、もう一つは五本の横線と四本の縦線が格子状に被さった、いわゆる九字紋と称される模様だった。

「この二つの文様は、合わせてセーモンドーマンと呼ばれ三重県志摩地方に於いて、海女^{あま}達が身に着ける魔除けとして知られています。ああ、わかりますとも。どうして海女の魔除けが今ここで出てくるのかとお考えなのでしょう？ まあ最後まで話をお聞きください。

実はこのセーモンドーマン、その起源が陰陽道にあるのではないかという説があります。その説では、このセーモンドーマン^{あしやどうまん}というのは、それぞれその名をかの有名な陰陽師、安倍晴明と芦屋道満^{あしやどうまん}に由来すると言われているのですよ」

「安倍晴明……は知っていますが、その芦屋道満というのは……？」

「おや、道満をご存知ない？ まあそれも致し方ないかもしれませんね。道満は晴明に比べれば知名度はそう高くない。しかしその力は何も晴明に劣っていたわけではありません。平安の世において、晴明と並ぶ大呪術師と知られ、実際に式神対決において晴明を破ったこともある程なのです」

「はあ……すごい人物なのです」

「そうです。つまりセーモンドーマンの文様とは、偉大な陰陽師二人の力が宿った強力な術式なのです」

「しかし……所詮は魔除けなのでしょう？ 正直、き、気休め程度

で効果があるとは……」

「わかりますよ、戸田さん。貴方の不安は」

虎次郎は大きく頷いた。その態度はやはり自身に満ち溢れていて、些ちやせかも見ずからの行いに疑問を挟んでいないようだった。

「しかしではこの文様が単なる魔除けでなかったとしたらどうでしょう。実際に、気休めではない効果があるとしたら？ お教えしましょう戸田さん。この矢は、なんと芦屋道満直系の子孫の陰陽師から、直に譲り受けた逸品なのです」

「芦屋道満の子孫から……譲り受けた……本当ですか？」

ずっとセーモンドーマンの紋に疑いの目を向けていた戸田の様子が、初めてそこで変わった。

「もちろん。ぼくは職業柄、あらゆる『キカイ』の担い手達と交流がありましてね。いいですか？ この紋は只の図形ではありません。かの陰陽師が使役する式神が、実際にこの矢にはセーモンドーマンの紋を持って封印されているのです。そして式神は、矢の持ち主に危険が及ばんとなった時、その力を以って主を護るように命令を受けています。いいですか、戸田さん。これから二十四時間、何時如何なる時もこの矢を身近に置いておくようにするのです。そして悪しき気配を感じたならば、その視線のある方向を恐れることなく振り返り、セーモンドーマンの紋を振りかざすのです。さすれば貴方をつけ狙う魔の物は、強力な式神の手によって打倒され、その時遂に平穏なる日々が帰ってくることでしょう。恐れることはありません。今や貴方の内にある恐怖こそが、事態の解決を阻む最大の障害なのです」

虎次郎は言った。

二 『悪夢』

「最近、毎日のように夢を見るんです」

ぐるぐるぐるぐるぐる、と。

目の前に広げた手帳にひたすらに鉛筆で円を書き続けながらそう口にした女性に対して、虎次郎の頭には二つの返答が浮かんでいた。一つ。「夢ならばくもほぼ毎日見ます」

二つ。「目、回りませんか？」

結局虎次郎は少しの逡巡の後に、そのどちらでもない三つ目の返答を捻りだしてそれを言葉にした。後から考えれば、その判断は極めて適切なように思われた。

「どんな夢ですか？」

「人を殺す夢」

ぽつりと彼女は即答した。相変わらず右手は円を描き続ける。ぐるぐるぐる。

彼女は名を聡子と名乗った。まだ二十代半ば程の若い女性である。第一印象は――まるでパンダのようだ、であった。しかし別にそれは無論白黒で愛くるしいという意味ではない。要するに、それ程に目の下の隈が濃かったという意味である。素性を聞くと、大学に通いながらボーリング場の受付のアルバイトをしているのだと言う。なるほどそれで円を書いているのか、とふと思いつ。

いや関係ないか。

「具体的には誰を夢の中で殺してしまうのですか？」

「わかりません」

ぐるぐるぐる。

「どうして殺してしまうのですか？」

「知りません」

ぐるぐるぐる。

「どのように殺してしまうのですか？」
ぴたり。

と、手が止まった。黙って様子を見やる。すると聡子は、恐怖に駆られた者のそのように瞳孔をカッと見開いて、まさに噛み切らんという程に下唇を噛んでいた。そうして手が動く。これまでより

ぼきん。

考えていると、今度はそんな音が鳴った。言うまでもないが、聡子が机に叩きつけ続けていた色鉛筆が中間辺りでぽっきりと折れた音である。彼女はしかなおも折れた鉛筆を握り拳にして話さないまま、まさしく病的な様子でゆらりと顔を上げた。

「けれども、本当に恐ろしいのは――」

貴女です。

そう聡子の言葉尻に繋げかかった言葉を吞み込む。だが実際のところそれはかなり正直な感想ではあった。

「夢そのものではないんです。もちろん悪夢ではありませんけど……本当に恐いのは……この悪夢が正夢であるという予感があることなんです！　いつか私はあの夢のように、残酷に誰かを殺してしまうのではないかと思うと、とても気が気ではなくて！　ああ……私はいったいどうしたらいいんでしょうか。このまま自分の夢の示す未来に怯えて過ごすのは、もうたくさんなんです……」

そうして聡子はいいに色鉛筆を手放すと、そのまま両手で顔を覆って涙に暮れ始めた。虎次郎はそんな依頼人の様子に驚きを禁じ得なかった。探偵は、てっきり目の前の女性は何か手を動かしながらではないと喋れないと思っていたからだ。

「話はわかりました。つまり貴女は、正夢の示す殺人の未来をどうにかして回避してほしいと、そうぼくに依頼したいわけですね？」

「そうです」

「ふむ。では一つ、依頼を受ける前に肝心なことをお聞きしたいのですが……どうして貴女はその悪夢が正夢であるとお考えになったのですか？」

「そういう予感があるからです」

即答。

「……」

虎次郎はしばらく考え込んだ。いったいどれくらいの時間そうして沈黙が続いただろう。まさしくそれは地球誕生より現在まで、四

十六億年の月日にも勝る濃密な時の経過であった。

わけではない。

「さて、聡子さん。貴方の恐怖に晒される日々も今日までです。ぼくは今、貴女の抱える問題をすっかり解決する方法を思いついたところですよ」

「ほ、本当に!？」

虎次郎が言うと、聡子は飛び上がりような勢いで声を上擦らせてみせた。優しく探偵はそれに微笑み返し、「しばしお待ちを」と言い置いて立ちあがり自らのデスクの前へと赴く。そしてそこからある物を取り出すと、それを手に彼は依頼人の対面へと引き返した。そうしてそれを不健康パンダへと翳^{かざ}して見せる。

「ナ、ナイフ？」

目の前の女性は息を引きつらせた。

虎次郎の持ちだした物は確かにナイフであった。しかしそれは時代がかかった中世ヨーロッパ風の装飾の施された木造りの柄を持っており、『ナイフ』と言うよりは、『短剣』とでも表現するのが適切に思われる代物だった。

「その通り。ナイフですが、もちろん只のナイフではありません」
言葉とと共に、虎次郎は右手で短剣を逆手に持ち、それを自らの左手の甲へと差し入れて見せた。

突然の探偵の振る舞いに、あっ、と声を上げ聡子は目を逸らす。だが次第に不審感が募り、恐る恐る顔を上げてた。手のひらに風穴が空いたろうというのに聞こえるべき苦痛の声の一つも耳に入らなかったからだ。そして彼女は不思議な光景を目にした。短剣は、一見柄の根元まで左手の甲に刺さっているように見えて、しかし虎次郎の手には傷一つなく、しかも刃が手を貫いてすらいなかったのである。一瞬不可解に思ったが、少しすると聡子はその光景の理由に思い至った。そういう物の存在を、目にすることは初めてであったが、話としては知っていたからだった。

「もうおわかりになったかと思いますが」

虎次郎は短剣を左手の甲から“引き抜いた”。すると、柄の中に引っ込んでいた短剣の“刃”が、ばね仕掛けで押し出されて、再びその姿を現した。

「これは本物ではなくて、舞台などで使われる小道具の短剣です。よく出来ているでしょう？　遠目に見た限りでは、形状も刃の光沢もまるで本物のようです。まあ手に持ってみれば即座に小道具であることはわかりますがね」

「それはわかりましたが……いったいそれをどうしろと言うのですか？」

困惑顔の聡子に、虎次郎はおもしろがるようにして笑いかけた。

「聡子さん、これを貴女に差し上げます。貴方は今日からこの偽物のナイフを、二十四時間常に肌身離さず身につけておくようにするのです」

「それは、つまり、どういうことですか？」

「何、発想の転換ですよ。残念ながら聡子さん。ぼくは霊能力者でもなければ超能力者でもない。あなたの正夢に導かれる未来を回避する方法など正直見当もつきません。ですのでここは考え方を変えて、未来を回避することなく、起こり得る惨劇だけを回避しようと考えました。良いですか？　貴女がいつかどこかで何者かをナイフで刺し連ねてしまう時、それがどんなシチュエーションであるかはわかりませんが、一つ確かなことはその時貴女の手の中にナイフがあるという事です。ですからその未来を回避しようと言うのなら、考え得る対策はまずナイフを身近に置かないことでしょう。しかしこの手の予知の厄介なところは、いくら本人が起こる未来に必要な要素を神経質に排除しても、運命とでも表すべきなのか、たいていの場合その要素の方からこちらに飛び込んできて結局予知した未来が現実になってしまう辺りなのです。故に発想の転換です。未来を回避せず、歓迎してしましましょう。いいですか、下手にナイフを遠ざけようとするから、いざと言う時にナイフが手元に転がり込んでしまうのです。ならば逆に、常にナイフを身につけるようにす

ればいい。但し、偽物のこのナイフをね。そうあれば、もしナイフが必要とされるシチュエーションになった時、最初に手にする“ナイフ”はその偽物の短剣になります。そして夢で見た何度も誰かを刺し貫く事態に直面するわけですが、そこで貴女が用いているのは当然この偽物。その為相手を傷つけることもなく、貴女が殺人者になる道理はなくなるのです」

「なんだかよくわかりませんが、つまり私はこのナイフをずっと持っていればいいのですね」

「その通りです。ついでにそれを偽物ではなく本物だと思い込んでおくと、より良い効果が期待できるかもしれませんね」

虎次郎は微笑んだ。

三 『キャトルミューティレーション』

その場にいることが似つかわしくない存在、というものがある。

例えば客が全員正装しているような高級レストランにTシャツと短パンの出で立ちの者がいればそれは似つかわしくない。例えば野球の試合を行っている中で、一人その中にサッカーのユニフォームを着てグラウンドに立っていればそれは似つかわしくない。例えば剣と魔法のファンタジー世界にちゃんまげを結った侍が日本刀を振りかざしていればそれは似つかわしくない。

そして――『キカイ』なるものを求めて探偵を営む久遠虎次郎の前に、爆発するようなドレッドヘアーが特徴的な、ラッパのようなファッションの若者が依頼人として訪れている、それもまたその場に似つかわしくない事であった。ちなみに最後のそれは、例え話ではなく今実際に虎次郎の目の前で起こっている現実である。

「いやだからさ、マジ宇宙人だと思うんだよねオレは」

大島田と名乗ったドレッドヘアーの青年は強調するように言った。ちなみにその台詞は、彼が本日ここを訪れてから三回目であった。

「そう思う根拠はなんですか？」

当然この質問も三回目である。

「そうに決まってるからだよ。だってさ、ほら、あれじゃね、宇宙人じゃなきゃ説明つけらんねーじゃんこんなのさ。あんたもそう思うだろ？」

「ふむ……では確認しましょう。まず貴方は、一週間前の夜半、大学の御友人達とお酒を飲み交わし一人帰路についた。するとその途中、夜空に不思議な発光体が浮かんでいるのを発見した」

「そう、UFOな」

「なぜ貴方はそれをUFOだと？ 星や飛行機だとは思わなかったのですか？」

「あ？ 何言ってるんだよオメーよ。UFOだぞ？ 星やら飛行機なんかとは全然違うだろ。間違えるわけねえよ」

質問の答えになっていない。とは思ったが、口にはしなかった。不毛な会話になるうことは目に見えて予測出来たからである。

「……貴方は未確認飛行物体を追ってみた。しかしすぐに貴方はそれを見失ってしまった。気がつくと、貴方は未確認飛行物体を追って見覚えのない風景の所までやってきていた。そしてその次の瞬間、驚くべきことが起こった」

「そう！ そうなんだよ！」

急に大島田は身を乗り出すようにして声を上げた。彼は話がこの段階に至る時、いつもこのような反応を示した。

「突然そこでふっと記憶がなくなっちゃったんだ！ そして目が覚めるとオレは自分の部屋の布団の上にいた！ こんなことあると思うか？ ありえねーだろ。どうやって俺は家に帰ったってんだ？ しかもなんで記憶がないんだ。こりゃあれだと思っただよ、オレは絶対。なんつったっけあれ？ 宇宙人に攫われて実験されるってやつ。ああ思い出した。あれだ！ キャトルミューティレーションだ！」

キャトルミューティレーションは宇宙人が家畜を攫っていく現象

である。

どうやら大島田は家畜であるらしい。

「あんた超常現象専門の探偵なんだろう？　なんとかして宇宙人からオレの記憶を取り返してくれよ！　自分で言うのもハズいけど、オレこう見えてビビりでさ、結構ブルっちまってるんだよ。宇宙人になんか体の中いじられたかと思うと、気持ち悪くて夜も眠れねーんだ！　なんとかしてくれよ！」

大島田は懇願するように言い、虎次郎は相手に悟られないように嘆息した。

「しかし状況証拠だけでは動きかねますね。せめて貴方が本当に宇宙人に攫われたという物的証拠がなければ――」

「それならある」

遮るように大島田。そして自らのモジャモジャした頭髪をかきわけるようにして、前髪と額の付け根を示してみせた。

そこには白い湿布が貼ってあった。

「……それは？」

「宇宙人に記憶を奪われた朝、額が不自然に膨らんでいたんだ。こりゃあれだ。よく言うだろう？　宇宙人に攫われて、体の中に謎の金属を埋め込まれてたって話。こいつはその手術後だ」

「……」

じっと、大島田は真剣な眼差しで虎次郎を見つめてきていた。その瞳に嘘はなかった。熱い情熱の光の様なものさえ宿っていた。彼の視界に入らぬ所で、閑子が笑いだすのを堪えるように、口元に手を添えて頬を膨らませていた。

「たんこぶでは？」

「バカ！　オメー一週間も引かねえたんこぶがあるかよ！」

「いえ、ぼくには既に全然腫れていないように見えるのですが――」
「なわけねーだろ！　今でもちよっと触るだけでチョー痛えんだからよ！」

虎次郎は再び小さくため息をつく。しかしそれで何か事態が変動

することは無い。残念ながら、虎次郎にそんな特殊な能力はなかった。本当に残念なことだった。

「なあ！　なんとかしてくれよ！　あんた色々と普通じゃないんだろ！　噂で聞いてるぜ！」

「と、言いますと？」

「ああ、なんかすげー不思議な力を持つてるとかなんとか。死者と話せるとか超能力が使えるとか。そういう特殊な能力を持つてるからこそ超常現象専門の探偵なんだってオレは聞いたぜ」

「ふうむ……閑子君。ぼくは超能力なんて使えたのかい？」

「先生にお味噌汁を作らせると、いったいどうやったらこんな味になるのかと驚くぐらいに不味くなります。あの辺り、一種の超能力なんじゃないでしょうか」

「なるほど。と、言うわけで大島田さん。どうやらぼくが持っている能力は味噌汁を不味くすることぐらいのようです。……が、そんなぼくでも貴方の問題の一応の解決法は、閃くことが出来ました」

「ほ、本当か？　今みたいな冗談の話……じゃないよな？」

「もちろんですとも。確かにぼくは貴方が期待するような異能は持ち合わせていないものの、『キカイ』を探求し専門とする探偵であることは事実。そのぼくからすれば、貴方の抱える問題など取るに足らぬ些事に過ぎません。貴方はぼくの言う通りにすればそれで良い。さすれば、早ければ明日にでも貴方の悩みの種は綺麗さっぱり消えてなくなることでしょう」

半信半疑の視線を向けてくる大島田に、虎次郎は先程までの憂いの表情をすっかり失くして、普段の自身に満ち溢れた薄い笑みを返して見せた。事ここに至って、解決法を思いついたと口にする探偵に、はったりの様相はまったく見えなかった。

「良いですか大島田さん。貴方の取るべき行動は一つです。即ち、貴方が未確認飛行物体に攫われたかの地に、再び舞い戻るのです」

「あ、ああ？　なんだそれ？　どういう意味だ？」

「簡単なことですよ。『犯人は犯行現場に戻る』。犯罪捜査の鉄則

であり、これはまた『キカイ』なる事象においても例外ではありません。大島田さん、貴方は宇宙人にインプラントを埋め込まれたと先程申しましたね」

「インプラント？」

「『謎の金属』ですよ」

「ああ、うん、そうだな」

「なれば貴方は宇宙人の何らかの調査対象であることが考えられます。そしてそうである以上、実験の経過を見届ける意味でその後の貴方の行動も宇宙人に監視されているのだと考えることには蓋然性があります。そして重要なことはここです。貴方は先程記憶を抜き取られたと仰いました。宇宙人がそんなことをしたのならその理由は何？ それはもちろん当然宇宙人が自分達の存在、そして実験内容を被験者の貴方に思い出させない為です。然らば貴方は、記憶を失っていないふりをすれば良いのです。宇宙人に、自分達の実験は失敗した。被験者は記憶を残していると考えさせれば良い。そうすれば、彼らはその失敗を補う為に、必ずや貴方に対してなんらかの行動を起こしてくることでしょう」

「ああ、うん。なるほど」

大島田が神妙な顔をして頷いて見せる。人は、相手の話す内容が理解できていない時こういう表情をする。

「その証明が再び現場に戻るといいう行動なのです」

「でも、オレ場所なんて覚えてないぜ」

「思い出せるはず。いえ、ある程度までは絞り込めるはずです。貴方は未確認飛行物体を追う際何か乗り物を使いましたか？」

「いや……歩きだったな」

「と言うことは貴方が攫われた場所、仮にXとしますが、Xは貴方の最後の場所の記憶がある場所から歩いていける距離にあることになります。さて次です。貴方が最後に見た風景、それはどんなものでしたか？ 住宅が立ち並んでいたか、商店街か、あるいは野っばらだったのか」

「それは……うん、そうだ。確か近くに線路があった。そうだ！高架線の下を直前に通ったぞ！」

「そこまで思い出せばもう答えは出たも当然です。Xは貴方が未確認飛行物体を発見した地点から、歩いていける距離にある高架線の下ですよ。今晚から早速、条件の合う場所に赴いてみてください。辺りを引けば、必ずや宇宙人は向こうから接触してくるはず」

「そうか。うーん……それはわかったけどさ。肝心なこと、一つ訊いていいか？」

納得したようで、しかしどこか不安そうな面持ちで、大島田は言った。

「どうぞ」

「宇宙人を誘き寄せるのはわかった。でもさ、肝心のその後はどうなんだ？ オレ、結局また攫われることになったりしねーか？」

「ご安心を。そうならないように、これから二十四時間、いつなんどきもぼくが隠れて貴方を張り込んでおきますよ」

虎次郎は、まったく余裕の態度でそう告げた。

四 『目（乙）』

視線だ。

“目”がある。

何者かが——“目”が自分を見ている。

戸田は、会社帰りの駅を降りたところでふとそのことに気付いてしまった。このところ彼を見つめる例のそれのものに相違なかった。だが——これもまた例のごとく、その視線の主が誰かは戸田にはわからなかった。

駅前で突然に立ち止まる戸田を、同じ電車を降りた乗客達がある者は無関心に、またある者は少しばかり気にかけてしかしそれ以上に関心は寄せることなく追いつき過ぎていく。

戸田はあくまで平然を装って、少なくとも自分ではそのつもりで、再び足を動かし始めた。じつとりと、背中が汗ばんでいく。

探偵の元を訪れてからこの日まで三日間、戸田が“目”の存在を感知することはなかった。わずか三日とはいえ、それほどの期間を“目”が沈黙していることは、ここ二カ月あまりでは一度もなかったことだ。よもやこれが探偵より渡されたセーマンドーマンの紋章の効果かと戸田はどこかで勘繰っていた。それならば、遂に自分は日々の安息を奪っていた“目”の恐怖から解放されたのではないかと、戸田は内心で淡い期待を抱くようになっていた。

しかし所詮期待は期待に過ぎなかったようだった。正体不明の監視者の陰湿な視線はいまだ確かに存在していて、戸田にその照準を合わせていた。どうやらこの三日間、戸田が怪異に襲われなかったのは、単なる偶然であつたらしい。

戸田は歩く。決して後ろを振り返らないようにして。

大通りから脇道に逸れる。

人氣がなくなる。

街灯がぼつぼつと並ぶ道。

時折不規則に点滅する明かり。

頭上を闊歩する虫達。

グロテスクだ。

虫は嫌いだった。

わざと口を開けたままの鞆の中には、セーマンドーマンの紋が描かれた破魔矢が入れてあった。鞆を持つ手に汗が滲んだ。

ごくり、

と喉を鳴らした。

視線は一定の距離を置いて、戸田の背後にあった。

戸田はさらに歩く。

目の前に見える高架線を潜れば、自宅まではあとわずかの距離となる。今までは、そのわずかの距離を緊張と恐怖に晒されながら、息を止めるような気持ちで通った。

けれどももう今日は違う。

違うのだ。

唾を飲み込みながら、言い聞かせるようにして胸中で繰り返す。
探偵の言葉を反芻する。信じる。

一筋の汗が、両の眼の間をつるりと滑りおちた。

ぽっかりと空いた高架線の下の闇の中に身をいれ、通り過ぎた所で、

戸田は足を止めた。

視線の主は、高架線を跨いだ向こう側に、今この瞬間いる。

そんな確信があった。

汗まみれになった手。その掌からは今にも鞆が滑り落ちそうで。
重い。背中が重い。

それでも、戸田はその場でゆっくりと振り返った。怯える日々は
もうたくさんだった。

恐怖と、そしてわずかな好奇心。

暗がりの先。

戸田は見た。

人影。

シルエット

影絵でしかなく、人相風体はまったくわからない。

それでも——確かなことは——

——目——

その目が、じっと戸田を見つめていたことだった。

後はほとんど無我夢中だった。戸田は考えるより先に鞆の中に手
を入れ、魔除けの護身具を取り出していた。

(ままよ！)

そしてそれを——矢の羽に描かれたセーマンドーマンを突き付け
る。

瞬間、事態は急速に動き出した。

「あああああああああああああああつ！」

悲鳴のような甲高い声が辺りに響くと同時、高架線の向こう側の

死角になっていた場所から、何かが勢いよく飛び出したのだった。それは体当たりをするように“目”に向かって突進し、そのまま得体の知れない二つの影は、道の脇の草むらにもつれあうようにして転がり込んでいく。

戸田は一瞬何が起きたのかわからず振りかざした手もその場に立つ足も動かすことが出来なかった。だがすぐに頭が働いた。

（そうか……今のが、式神か！）

探偵は言っていたではないか、持ち主に危険が迫る時、セーマン・ドーマンの紋に封印された式神がその身を護るのだと。つまりそういうことなのだ。長い間戸田を悩ませてきた何者か、おそらく怪異であるそれは、立った今式神の手によって打ち倒された。事実今の瞬間にはどこからも怪しげな視線は感じられない。

やったのだ。ついに自分は救われたのだ！

「は、
は、
は、
は、
は」

そう気付くと、自然と顔が綻んで行く。

[illegible]

回れ右して、駆けだす様にして戸田は歩みを再開した。その足なんと軽いことか！ どうやらそれほどまでにかの視線の存在は自分のストレスになっていたらしかった。

だかもはやそれも過ぎたこと。邪悪な怪異は打ち倒され、ついに戸田の待ち望んだ平穏なる日々は訪れることだろう。

式神万歳！ セーランドーマン万歳！ キカイ探偵万歳！！

五 『探偵はかく語りき』

久遠虎次郎という男と知り合ってからこの春でおおよそ一年が経つだけでも、こと彼の詳しい素性やら経歴やらについてとなる
と、私は未だにほとんど何も知らないと言ってよかった。例えばそれは、このほとんど仕事らしい仕事をしている姿を見たことがない

この男が、どうやって生計を立てているのだろうかという日常的な疑問から、いったい彼はどんな子供時代を、どこの学校で過ごしたかという過去の事、正確な年齢、ついでに言えば助手である烏丸閑子嬢の素性も、その辺に関しても私は一切の情報を持たない。久遠について私が知っている事と言えば、それはもう本当に些細な事柄ばかりで、例えば食べ物好みはどちらかと言えば甘党であること、戦争前後に書かれた昭和の探偵小説や怪奇小説を好んでよく読むこと、将棋や囲碁、チェスなどの盤上遊戯には滅法強いこと、だいたいそれぐらいだった。

別にそれ自体に問題があるわけではない。私がこうして頻繁に久遠の元を訪れるのは、何も彼の人生や思想に口出したい訳ではないからである。私が久遠との友人関係に期待するものは、ひとえに彼の『キカイ探偵』という肩書の下に集まってくる様々な奇々怪々な事件の体験談、遭遇譚であった。何を隠そう私もまた、久遠同様に怪奇小説の類は大の好物なのだ。

では何が問題なのかと言うと――それは今この瞬間においてという意味であるが――問題なのは、私が久遠について知っている三つ目の事柄、彼が盤上遊戯に滅法強いのだというその一点であった。

局面は既に終盤。私の飛車角の首は既に久遠の軍勢の猛攻の前に刈られ、王将は只一人金将を護衛に、半ば制圧されかけた本陣からなんとか脱出せんと言うこの体の有様だった。もはや詰まれるのが時間の問題であるのは目に見えており、潔い散り様を示したいのであれば早々に投了を宣言するのが得策であると思われた。しかし私の繰る王将にもそれなりのプライドというものがあるだろう。過去に遡って連続三十局、圧倒的大差の下に投了するというのは当然気持ちの良いものではない。今回ばかりはなんとか一矢報いたいと考えるのは、当然の感情のほずだった。もつとも、二十局前から同じ様に考えて、結局何も出来ずに投了を繰り返しているのだが。

「ところで久遠君。閑子ちゃんから聞いたよ。つい先日君の元になかなか変わった依頼人が三人立て続けにやって来たそうじゃない

か。『正体不明の怪異につけられる男』、『夢で殺人の未来を予知する女』、そして『宇宙人に記憶を奪われた男』ときた。話を聞く限り、いやはやなんとも君好みな『キカイ』な事件の様相じゃないか」

私が言うと、

「ああ、そんなこともありましたね」

と久遠はなぜか苦笑して気のない返事をしてみせた。

私が対局中に突然こんな話を切り出したのは、何も勝負を捨てて思考を放棄したからではない。むしろその逆で、なんとか久遠の気を将棋盤から逸らさせて隙を作り、そこに延命の活路を見いだせないかと考えたからだだった。とは言え、事件自体に対する興味もまったくないと言うわけでもない。

「そして君はその三人に、一様に一見なんの効果もなさそうな妙な助言を与えたと言う。それは結局どういうことだったんだい？」

「君が今言った通りですよ」

「と言うと？」

「意味など特にないですよ。ぼくはなんとか彼らを納得させた上で早々にお引き取り願おうとその場で思い付きの口から出まかせを捲し立てただけです。まあ、まったくなんの効果もない、というわけでもないとは思いますが」

「えっ、それはつまり……」

「つまり彼らは三人揃って真の『キカイ』の体験者ではないということですよ。言うなれば、内なる精神に問題を抱えた方々だ。まあ、そういう意味では人の心もまた『キカイ』の温床ではあるのかもしれないませんがね」

平然と久遠はそう言い、私はちよつと驚いた。するとどこにも不思議などなく、怪異も予知夢も、宇宙人もいなかった事になる。

「どうしてそう思うんだい？」

「どうして？　ぼくも同じことをそのお三方に訊きましたよ。すると答えはこうでした。『視線を感じたから』『正夢だと予感したか

ら』『そうに決まっているから』。……わかりますね？ いちいち詳しく説明するまでもない。彼らは三人揃いも揃って論理的判断によって自身の体験した現象を真に怪異なることだと結論付けていないのですよ」

「ああそうか。成程。確かにそうだね。するとなんだい？ 彼ら三人の依頼はまったくの妄想、思い込みによるものだったと言う事かい？」

「まあ、ざっくり言いきってしまうならそうなりますね」

「しかし君は彼らにそれぞれ助言を与えたそうじゃないか。彼らの遭遇したものの正体が彼ら自身の妄想にあるのだとしたら、君の与えた助言はなんの効果ももたらさないんじゃないかな」

「かもしれませんね」

「かも？」

「ええ。ぼくが彼らに言ったことは、半分以上は出まかせですが、まったく何も考えなしだったわけでもありません。要は彼らの精神のひずみの根源を見定め、それを正せば良いのです。そしてぼくは彼らにそれを目的とした助言を施したつもりです。まあ効果があるかどうかはわかりませんがね。ぼくは精神医学の専門家ではありませんし、何せ半分以上は出まかせなわけですから」

言って、久遠は自身の飛車を前進させる。

殿、西方にも敵の兵の姿が。退路を断たれました。如何いたしましょう？

「それで彼らの精神のひずみとはどんなものだったんだい？」

「そうですね……。まず戸田氏ですが、彼の根底にあったのは根の深い強迫観念でしょうね。戸田氏はぼくの元を訪れた時、明らかに栄養失調を思わせる不健康な痩せ方をして、身の振り方一つとっても挙動不審であり言葉にはひどいどもり癖がありました。あれはすべて自分を見つめる視線に対する恐怖による影響でしょうか？ いえ違います。痩せ方はともかくとして、あの落ち着かない態度やどもりはその人物が持つ本来の習性です。恐怖に目を泳がす、とい

う人はいるにしても恐怖に貧乏ゆすりを見せる人はいないでしょう。そうしてああした習性を持つ人物は、多く外部からの圧力に弱く自信をあまり高く持てない傾向があります。加えて自己嫌悪が強い為、すぐに自らを過小評価し、それがまた自信喪失につながるという悪循環を精神の内に抱えているのです。彼の場合、そうした精神上的の循環に、ある時何かの拍子に穴が空いてしまったのでしょうか。彼はその結果、自己を苦しめるストレスを実体を持つ“怪物”として幻視したのです」

「それが彼の主張した視線の正体なのかい？」

「そうです。言わば“目”の正体とは、彼自身の自己を蔑む目だったのですね」

「では君が彼に渡したセーマンドーマンの紋の入った破魔矢とは？」

「あれは文字通りの意味での『御守り』ですよ。実際の“目”の正体がなんであれ、戸田氏にとってはそれは本物の怪異でした。それ故に、怪異に有効そうな護身具を、それを効果的だと信じ込ませて持たせることにより、実際に幻影の怪異を封じることになるのではと考えたのです」

「ふうん。ではなぜそれがセーマンドーマンだったんだい？」

久遠は肩を竦めてため息をついた。

「あれは閑子君の稚気以上の何物でもありません。ぼくとしてはそれらしい物ならなんでも良かったのですが、まさか彼女があんなわかりにくい物を持つてくるとは。おかげで戸田氏を納得させるのが大変でしたよ」

「成程ね。戸田という人についてはわかったよ。それでは次の聡子さんという人はいったい何だったんだい？」

「彼女は只の不眠症ですよ」

久遠はあっけらかんと即答した。

「目の隈がすごかったですからね。いえ、夢を見ている以上寝てはいるのですが、きつとそれが常に浅く、かつ断続的なのです。うね。そして彼女はその不眠の原因を夢そのものに見たのです。『

眠れないのは恐ろしい夢を見るからだ』という具合に、無意識の内にね。ですので一番手っ取り早い解決法は睡眠薬の一つでも手渡すことなのでしょうが、安直にそうするわけにもいかなかった。何せ彼女は夢の通りに殺人を犯す危険がありましたからね」

「えっ、どういうことだい？　今君自身が正夢ではないのだと否定したばかりじゃないか」

「夢というのは概してその人物の願望を示すものですよ。彼女は『人を殺す夢をみた故に人を殺す』のではなく『人を殺したいからこそ人を殺す夢を見るのです』」

ああ、成程。そういうことか。

「そういうわけですので彼女には小道具の短剣を手渡しておきました。あれでうまくストレス解消を図ってくれば良いのですけどね」

「二人目まではわかったよ、久遠君。では最後、宇宙人に攫われたと主張する青年、大島田君と言ったか。彼はなんだったんだい？」

すると、そういうわけか久遠はこの男には珍しく呆れたような表情を作ってみせた。

「彼はお酒飲み過ぎて、酩酊状態となり記憶を失ったのですよ」

「……」

「……」

「えっ、それだけ？」

「それだけですよ」

「でも彼は知らずに家に帰ったと言ってたんじゃないのかい？」

「よく聞く話ではないですか？　それくらい」

確かによく聞く。

「頭にできたという腫れは？」

「酔って転んで頭をぶつけてできたたんこぶでしょうね」

「まあ、そうか……。そう言われると本当にそれだけの話だね」

「そうですね」

「じゃあなんで彼はそれを宇宙人の仕業だなんて思ったんだろうか？」

「さあ？ SF趣味だったんじゃないでしょうか」

「君が記憶を失った場所に行けと指示したのは？」

「それが記憶を呼び起こすきっかけになってくれればと考えただけですよ。どの道彼が宇宙人に襲われることはないのですから何も気にすることはありません」

私は大きな落胆と共に深く嘆息した。初め、なんとも不思議な事件に見えた三つの事柄が、あっという間につまらない——と言うかくだらしない現実解体されてしまったからだ。期待外れとはまさにこの事である。

「がっかりしましたか？ まあ現実なんてこんなものですよ。例えばくの下とは言え、君が期待するような『キカイ』がそうそう降って湧いてくるものでもありません。『キカイ』は稀なる出来事故に『キカイ』なのですから。さて、無駄話も程々にして、勝負の続きと行きませんか？ まだ決着はついていませんよ。一応ね」

私は二重に期待外れな気分で将棋盤に視線を戻した。相変わらず、自軍は絶対絶命の危機に晒されたままだった。

殿、ご決断を。

と、その時だった。

「先生ー！ セーんせいー！ お客様ですよー！」

事務所の方から烏丸閑子嬢の甲高い声がした。

一旦勝負を中断すると、久遠と私は連れだって事務所の方へ向かった。そこにいたのは、晴れやかな笑顔を浮かべたドレッドヘアーの若者——大島田だった。

「おう！ 探偵さん！ 元気か！？ 元気だよな！ いやー、助かったぜ！ マジ感謝するぜ！ 全部あんたの言うとおりになったよ。宇宙人に攫われた場所、なんとか思い出して言ったらさ、現れやがったんだよ、宇宙人！ こんな魚みたいな顔の奴がさ。それでうわやべーどうしようって思ったらさ、こう草むらからもう一人小柄な、女みtainな宇宙人が宇宙語みたいな叫び声あげながら出てきてさ、そいつなんかナイフみたいな武器持ってたからオレもう無我

夢中でこうパンチしてそしたらそれが宇宙人に効いたんだよ、ぶっ倒れてさ！ その後はもうダッシュで逃げただけど、連中追ってこなくてさ、そしたらなんか段々オレすげーって気分になったぜ！
だってオレ、宇宙人を返り打ちにしたんだぜ？ すげーよな？
すげーよな！ なんかもう自信出てきたよ。もう宇宙人なんて恐くねーよ。来るならこいつてんだ！ また返り打ちにしてやつからよ！
とにかく探偵さん、あんがとな！ 報酬渡しとくよ！ じゃあな！ また何かあったら、そんな時は頼むぜ！」

卓の上には将棋盤と、その横に数枚の一万円札が乗っていた。私は両手を組んで久遠と向かい合いながら、つい先刻の嵐のような出来事について考えていた。

「久遠君、今のはいったいどういうことだい？ 彼は宇宙人に会ってなんていないんじゃないのかい？」

「さあ――」

その時だった。

「先生ー！ お客様ですにゃーん！ 出てきてにゃーん！」

事務所には、なぜだか右目に眼帯をした、しかし笑顔の聡子の姿があった。

「探偵さん、本当にこの度はありがとうございました。あなたのおかげで、私は人殺しにならずに済みました。つい先日的事了。ついに私の正夢が現実になる時がきたのです。夜の、仕事からの帰り道、私はふと嫌な予感がして咄嗟に草むらに身を隠しました。すると私が歩いてきた方向から、一人の凶悪そうな若い男が歩いてきました。一目でわかりました。きっと彼は私をずっと乱暴するつもりでつけてきたのだと。そして私は、この男から抵抗しようとして、殺してしまうのだと。そうしたらもう私は頭が真っ白になって持っているナイフがあなたにもらった小道具であることも忘れて男に躍りかかっていました。すると男は咄嗟に反応して、殴り返してきて、

あ、それで私今日の周りを痛めてしまったんですけど、とにかく相手は私が刃物を持っていることに恐れたのかすぐさま逃げ出してきました。探偵さん、あなたのおかげです。あなたのおかげで、事は私がちよつと怪我をするだけで済みました。もし私の持っていたのが本物のナイフだったら、私は最初の一突きで男を殺してしまっていたことでしょう。これはお礼です。どうぞ受け取ってください。気持ちとして、元々の依頼料にいくらか上乗せしておきました」

卓の上にあるのは将棋盤とそれなりの厚さになった一万円札の束。私は呆気にとられた気分であ遠と向かい合っていた。

「久遠君、君は確か彼らにほとんど出まかせを言ったのだとさっき説明したよね。つまり、どういうことなんだい？」

「さあ――」

と、

「先生――！ お客様です！ 探偵の中の探偵、出てこいやー！」

事務所にいるのは一瞬誰なのかさっぱりわからなかった。それは久遠も同様であるようだった。しかし目の前の爽やかな男が爽やかに「戸田です！」と告げたことから男が戸田なのだとようやくわかった。

「ああ、探偵さん！ あなたは素晴らしい！ 最高の探偵だ！ あなたの言葉通り、このセーマンドーマンの紋が記された破魔矢がすべてを解決してくれたのです！ ついに私の前に現れた怪異を、この矢を振りかざした事により召喚された式神が見事撃退してくれたのです！ それ以来私をつけ狙う“目”はどこかに消えてなくなりました。今では毎日もうなんともありません。これもすべてはあなたを頼ったおかげです。さあ、どうぞ報酬をお受け取りください！ え？ 何？ いくらなんでも多すぎる？ こんなにももらえない？ 何をご謙遜を！ あなたのご尽力のもたらした成果を考えればこれぐらい当然です！ さあどうぞ、遠慮することなく受け取ってく

ださい！」

卓の上に将棋盤がある。そしてその横に、相当な厚さになった一万円札も並んで置いてあった。私はもうさっぱりわけがわからない状態で久遠と向かい合っていた。

「久遠君、いったい何がどうなったって言うんだい？ 君はいったい何をしたんだ」

探偵は、苦笑して言った。

「さあ、ぼくにも何が何やら。世の中には不思議な事もあるものだ」

了

怪ノ二 『おかしな男』

各報道機関で異常気象だと騒がれた暑さもいくらか和らぎ、ようやく季節の移り変わりを実感できるようになった初秋に私は何年かぶりになる里帰りを果たした。お世辞にも私は孝行息子という性質^{たち}ではなかったので、元から両親に顔を見せるのは正月の年一度くらいしか例年機会がなかったのだが、久遠と知り合って以来その年に一度もなくなっており、親の顔を見るのは本当に久しぶりの事だった。本来ならばもう私は両親にも、親戚にも、久遠と出会う以前の友人とももう二度と顔を合わせるつもりなどなかった。別に誰かにそう指示されたわけではなかったが、『キカイ』の世界に足を踏み入れた事へのけじめとして、自分自身へ戒めとしてそうしていたのだ。私が踏み越えた境界とは、つまるところそういうものだった。

それでも私がその禁を破ってまで出向いたのは、甥が死んだのだという不意の凶報を聞いたからだだった。甥は姉夫婦の長男で、まだ小学校にも上がっていない年齢だった。海難事故だと言う。一家で地元の海水浴場に遊びに行った折、甥は初めての海で溺れて命を落とした。

葬式の席で祖母は海の魔物に引きずり込まれちまったんだと数珠を片手にしきりに嘯いていた。はてうちの村にそんな魔物の言い伝えなどあったらどうかと勘繰ったが、席が席であった為詳しく聞くことはなかった。

その時涙を流していなかったのはその祖母と私だけであった。なんだか私は、自分がひどく薄情者であるような気分がして、なんとも居心地悪い思いをした。悲しくないわけがない。甥とはまだ私が久遠に会う以前に、何度か会っているし、まだ赤ん坊だったその無垢さにずいぶんと心を動かされたものだった。あれは一つの感動だ

った。『命の重さ』と言うべき何かを、初めて実感した瞬間でもあった。

その命が消えたのだ。何も思わないわけがない。

加えて私は姉が取り乱して涙にくれている様を見るのもつらかった。姉は、子供時代から時に気難しく変わり者だと評される事も少なくなかった私と違い、誰に対しても明るく接する気立ての良い人間で、それは私に対しても変わることなく、いつもこんな私の最大の理解者でいてくれた。しかしその日の姉は私の知る姉ではなかった。彼女の眼には亡くなった甥の亡きがらしか映らず、私の姿を見ても昔見た笑顔を作ることには遂に最後までなかった。

両親を含め、久しぶりにあった親戚一同がどんな顔をしていたのか、いまいち私は覚えていない。それは何も皆が揃いも揃って能面のような悲しみに沈んだ顔をしていたからというだけではないだろう。多分、私自身が既に彼らの知る私ではなくなってしまうていたからなのだ。今の私は、日々彼らのいる場所とは違う所から世の中を眺めている。『キカイ』の世界から。

帰り際母は今度の正月は帰ってくるのか、と訊いた。私はいいや、と答えた。仕事が忙しいのか、と母は訊いた。私はやはり、いいや、と答えた。じゃあなんで帰ってこないのかと問われた。私は曖昧に笑って誤魔化す事しか出来なかった。

最後に姉に何か言葉を掛けようとした。しかし、結局私は何も言わなかった。口にすべき言葉が見つからなかったというのもあるが、一番は姉の傍にはずっと彼女の選んだ夫が寄り添っていたからだ。慰めと励ましの台詞は、既に彼によって、ほとんど語り尽くされていた。

もうこの家に私の居場所はなかった。

わかっていたことだが。

踵を返し、私はもう二度と訪れることはないであろう古巣を後にしようとした。

「待って」

すると、そこで呼び止められた。振り返ると、まだ目を赤くしたままの姉の姿があった。そんなわけはないのだが、私はその日初めて姉の声を聞いた気がした。

「これ、あなたにあげるよ」

そう言って姉が差し出したのは、薄茶色の巾着の形をした御守りだった。

「これは？」

「御守り。ずっと幸人ゆきひとに持たせてたの」

『幸人』とは、亡くなった甥の名前だった。

「効果あるよ。幸人がまだ小さい時、高熱出して医者も解熱剤打つぐらいしか手がなかった時に、この御守りを神社で買って幸人に持たせたの。そうしたらみるみる治っていった。その後も、この御守りを持たせていると幸人はいつも怪我の一つもしなかった」

「でも……」

でも幸人は死んでしまったではないか。

そう出かかった言葉を呑み込んだ。まさかそんなことを口にするわけにはいかなかった。それでも姉はこちらの胸中を察したのか、悲しそうに頷いた。

「あの日は御守りを持つのを忘れてしまったの。なんでって言われてもわからない。本当に忘れてしまったとしか言えない。でもそうしたら、家に置き忘れてしまったら……あんなことが起きた」

沈黙する。どんな言葉も、姉を傷つけてしまいそうだった。

「お願い。貰って。正直……これを見るのもつらい。でも、捨てるわけにもいかないから……」

私は受け取った。

ありがとう、と姉は私に言った。そんな言葉は別に欲しくはなかった。

私は再び騒がしい都会に帰る前にと、中学時代までを過ごした静かな村を一人でぶらぶらと散策した。見る物すべてが懐かしかったが、同時にどこか空々しくも感じた。かつては確かに故郷だった土

地に、もうお前はここの住人ではないのだと突き放された心地だった。それは多分正しかった。

村をぐるりと回って、最後に海岸沿いを歩いた。甥が溺れたのはその場所ではなかったが、問題の海水浴場とは数キロも離れていない。海は穏やかで、とてもこの調子で、まだ幼児とは言え一人の人間が溺れ死ぬとは思えなかった。ましてそこは他にも利用者のいる海水浴場だったというに、どうして誰も甥を救えなかったのだろうか。と思った。けれども思っただけで、誰かを責めたりはしなかった。一時間ほど何もせずにそうしていたが、遂に海の魔物が現れることはなかった。

そうして私が最寄りの駅から電車に乗ったのは、既に夕暮れ時に差し掛かってからだった。この辺りを走る唯一の路線であるローカル線の上り車両に乗り込むと、車内は土地柄の為かどこか潮の香りがした。今日一日ずっと息の詰まる思いをしていたせいかな、電車に乗った途端急に私は肩に重い何かが圧し掛かるような強い疲労感を覚えた。無性に座り込みたい思いに駆られて、混んだ車内を空席を探して少し歩いた。するとちょうど一両分を歩いた辺りで、ぽっかりと一人分の席が空いているのを見つけて、私はそこに腰を降ろした。

溜息をついた。

途端に疲労からくる眠気が全身を駆け巡っていった。電車の中の居眠りなど、不用心極まりないと考え普段は自制していたが、この時ばかりは生理的な欲求に抗いがたいものを感じた。加えて、走行音を除けば静かであった車内の様子が、覆いかぶさるような睡魔に拍車を掛けた。

どうせ下車駅は終点である。寝過ぐすことはない。たまには列車の振動に揺られて体を休めるのも悪くはないかもしれない。

そう思って私は頭を垂れて瞼を閉じた。

ところが、だ。

そうした何やら急に眠ってはいけないうような気がしてくるのだっ

た。頭の中のどこかからもう一人の自分が警報を鳴らしているような、そんな感じだった。

なんだろうと目を瞑ったまま考える。この嫌な違和感は何なのか――。

と、ふいに気付いた。

視線だ。

誰かが私を見ている――？

私は薄く瞼を開くと、警戒するように――いったい何に対してなのか――うつむけていた顔を上げた。そうして辺りを見回すと、確かに私を見つめている男と目が合った。私の右斜め前方に座っていた男が、他の乗客が皆下を向いている中で、一人だけ顔を上げて私に視線をやっていたのだ。しかし男は一瞬後には誤魔化すように目を逸らして、周りと同じように自分の足元に顔を落とした。

いったい何なのか？ 男は何者なのか？ 気になって私は逆に男を観察してみた。男は三十代後半から四十代に足をかけたぐらいの中年で、着ているものがずいぶんと粗末な、まるで浮浪者であるかのような風体をしていた。浮浪者だと断定しないのは、彼の手先や顔などの、露出している肌が垢に汚れていなかったからである。彼は少なくとも、自信の体の清潔を維持できるような生活の中に身を置いているらしい。

男は私が逆に見返している間は、決してこちらを見やろうとはしなかった。しかしそれで私が視線を外すと、すぐに頭を上げて私の監視――なのかなんなのかわからないが、とにかく再開するのであった。

おかしい男だった。いったい何者で、何が目的なのか。しかしくら自らの記憶を手繰り寄せようと、私には男に見覚えなどなかったし、物珍しく見つめられる道理も思い至らない。初めはしかしそれでも実害があるでもないしと考え放っておいたが、二駅三駅と電車が進むうち、いよいよ私の中にもこの状況に対する気味悪さがすくすくと育ってきたのだった。やがてそれは奇妙な胸騒ぎとなり、

遂には生理的な吐き気を催す不快感にまでなっていた。そうなる
と流石にそれ以上無視する気にもなれず、私はいよいよ席を立つと男
の方へと歩を進めていった。

「あの……」

私がそう切り出しても、男は下を向いたままだった。男は徹底し
て、私と視線を合わせようとはしなかった。

聞こえなかったのか、聞こえないふりをしたのか、いずれにせよ
私が目の前にまで来ていることに気付いていないことはないだろう
と思い、もう一度だけ「あのう」と声を掛けてみた。

するとようやく男は顔を上げた。にやりと笑っているかのような、
口角の片方だけ釣り上げた厭な表情をしていた。薄気味悪かった。

「私に何か用で？」

「いいえ。むしろあなたが僕に何か用があるのではないですか？」

「私が？ あなたに？」

「ええ。ずっと見ていたじゃないですか。僕のことを」

男は私の言葉に反応して喉元から軋るような妙な音を出した。そ
れが声を立てて笑っているのだと気付くには少しの時間差があっ
た。

「そりゃあ見ますよ、そりゃあね。……あんただって私のことを見
ていたじゃあないですか」

言いながら、ぼたりと男の顎先から水滴が落ちる。汗？ これも
また奇妙だ。車内は冷房が効いているのかひどく肌寒いと言うのに。

「僕があなたを見ていたのはあなたが僕を見ていたからですよ」

「ほう、すると、あんたは……ははあ、そういうことか。あんた、
行き先は？」

男は急に話題を変えた。

「終点までですが。それが何か？」

「終点まで？ ああそう。……そうなの。ふうん。……じゃあ私は
次で降りるよ」

「え？」

唐突だった。まるで会話が成立していない感があった。

私がわけがわからず次の言葉に詰まっている間に、電車は彼が降りると宣言した駅のプラットホームに滑り込んでいく。そうして車両がガクンと慣性の法則に従い大きく揺れた後、男は立ちあがって――またあの嫌な顔をして――私の肩を気軽に叩いて言った。

「じゃあ、達者でな」

瞬間、私は心底肝が冷えたような心地に見舞われた。

男の汗にまみれた手は、まるで生きた者の手とは思えない程に冷え切っていたのだ。

身を縮こまらせて動くことのできない私を他所に、男は開いた扉の向こうのホームへと降りたって行った。何人かの他の客が立ちあがり、それに続いていった。

私はその場で振り返り、電車の窓から去りゆく男の姿を探そうとした。するとホームの上に、ちょうど私と鏡に映したかのような格好になってこちらを振り返る男の姿があった。

その目が大きく見開かれ口が動きかけた瞬間。

電車は動き出し、男は彼方の風景と同化していった。

果たして今の夢のような奇妙な邂逅はなんだったのだろう。私は電車が動き出した後もしばしその場に立ち尽くし、事の次第について考えた。だが、答えは出ない。言えるのは、今しがた私はおかしな男と出会い、おかしな体験をしたというそれだけであった。

そう結論付けると急に自分がひどく疲労を感じていたことを思い出した。それで私は元いた席に再び腰を降ろした。

傍で見る者には、あるいは私は奇妙な演劇を演じたように見えたかもしれない。そう思うとなんだかそのまま黙っているのも妙に気恥かしい気分になった。そう思って私は、

「いやあ、すいません。何やらお騒がせしました」

そう気を紛らわす為に隣の席の老人に声を掛けた。

しかし老人は下を向いたまま返事をしなかった。そう言えば彼は、自分が最初にこの席に落ち着いた時から眠っていたのかうつむいた

ままだったことを思い出す。そうしたら私は今もまた独り言を口にしたような気になって、余計に恥ずかしい気持ちになってきた。

私は大人しく、身体の欲求に身を任せて、瞼を降ろすことにした。

『――点。終点××。御降りのお客様は、荷物の置き忘れがないように――』

はっ、とアナウンスに反応して私は飛び起きた。

少しだけ体を休めるつもりが、本当に終点まで眠りこけてしまっていたようだった。見回すと、既に車内には自分以外の客は一人もいない。

私は急かされたわけでもないのだが、なんとなくそうしなければいけない気がして慌てて車両の外へと躍り出た。そんな私の姿が滑稽だったのか、ホームにいた車掌が変なものでも目にしたように私を見やる。それで私はまた恥ずかしさと気まずさに赤面してしまう。

これ以上何か言って墓穴を掘る前にと、私は無言のまま自分と車掌以外誰もいないプラットホームを後にした。

扉を開けた私を出迎えたのは中空に巻き上げられた大量の埃だった。一息事務所内の空気を吸い込んだ瞬間、肺の中に劇薬を流し込まれたかと錯覚し思わず咽びこむ。そんな私の様子を、白い三角巾で顔の下半分を隠した女の子がびっくりした様に覗きこんだ。

「おおー！ 甲斐さん、お久しぶりです！ お久しぶりでなんです。が、気をつけてくださいね、大掃除中で埃っぽくなってますから。できればあと一時間半程呼吸を止めているのが雑菌とかを吸い込んだりしなくてベストかと思いますよ」

「いや……うえっほっ……そんな、一時間半も無理だから……。どうしたんだい急に。大掃除だなんて。年末までには後三カ月程あるけど」

「年末もガッツ石松もムッシュかまやつも関係ないのです！」

びしり、と女の子——烏丸閑子嬢ははたき片手に人差し指を突きだした。彼女の瞳はいつになく真剣だった。閑子のこれだけ本気になった様子は、近所のスイーツ店の一日十個限定のマロンケーキの前にした時をおいて他に見たことがない。

「いいですか!？」 部屋の姿とは即ちそこに住まう人の心の姿を映す鏡なのです!　つまり部屋が散らかってあればその住人の心は散らかっており綺麗ならば綺麗であり、ファンシーで可愛ければファンシーで可愛くてパンクな感じならパンクな感じでアントニオ猪木がいれば元気なのです!」

「いやまあそういう考え方はわかるけど、なんか最後おかしくなかつたかなあ」

「おかしくありません!　まあ、つまり何が言いたいかと言うと……」

「言うと?」

「なんか散らかってるから掃除しようかなって思ったわけですね」

「前フリ全然関係ないし!？」

「まああまり気にしないでおいってください」

そこでようやくこの部屋の本来の主が声を上げた。

『久遠探偵社』の所長にして唯一の探偵にして『キカイ探偵』である、久遠虎次郎その人である。久遠はいつもの所長席に座りながら(しかし心なし居づらさそうではあるが)、いつも通り文庫本片手に頬杖をついていた。探偵は、助手の思いつきには一切無関心に、自らの生活のペースを守っているようであった。

「何やら昼間のワイドショーで部屋を片付けると幸運が舞い込む云々という内容の特集を見たようで。それ以来今までずっとこんな調子なのですよ。しかし一向に捗はかどっている様子がない。日の入りまでに最低限元の状態にまで戻れば御の字といったところですか」

「もー、先生他人事ひとごとみたいに言って!　誰のせいで遅くなってると思ってるんですか?　先生のせいですよ!　先生が素直に協力してくれれば今の十六倍は早く進むのに!」

「ぼくが君に協力しても頭数は二人なんだけど。あと十四人分の労働力はいったいどこから湧いてくるのかな」

「師弟愛により増幅されるのです!」

「ふうん、師弟愛ね」

「うげっ! 愛とか言っちゃった! 気持ち悪っ!」

「もうなんでもいいから掃除するならするでさっさとしてくれないかな」

「言われなくてもそうしまーす。あっかんべー!」

そうして閑子ははたきをふる――と言うかふり回すことを再開する。私は苦笑してその様子を眺めながら、机の前にある応接ソファに腰を降ろした。その場所はどうやら、閑子嬢の掃除と言う名の進軍からは免れているようだった。

「相変わらず騒がしいね」

「まあ、閑子君から騒がしさを取ったらなんの価値もなくなりますからね」

「こらそこ! なんか今めっちゃひどい事言ってますでしたか!?!」

耳ざとく聞きつけて騒ぐ少女を久遠はうつとおしそうに手を振って追い払う。この辺の彼女の扱いに関しては、友人は流石に馴れたもののようにだった。とは言え、この探偵と助手がどういう間柄なのか正確なところはよく知らないのだが。

「この度はご愁傷様でした」

文庫本を置いて、久遠は唐突に言った。

「亡くなられた甥子さんをはくは直接に知りませんので、杓子定規な物言いしか出来ませんが、ご冥福を祈りたいと思います」

「よしてくれよ、久遠君。別に僕はそれほど気に病んでるわけでもないんだ」

実際それは正直な心境だった。あまりの急な悲劇に、私は終始この件に関して現実感のようなものを欠いていた。私が甥の死を事実だと認識しているのは、葬式場で気丈だった姉の涙を見たからに他

ならない。あれがなければ、私はこの一件を性質の悪い冗談か何かだと今でも考えていたかもしれない。いや、実際私はまだどこかでそんな風に思っている節さえある。今思い返しても甥の葬儀は何かまるで白昼夢であるかのように実感が無い。

と、甥の葬儀と、それに『白昼夢』という言葉で私は里帰りからの帰路に遭遇した不思議な男との一件を思い出した。あれは何だったのか、今でも結局わからずのままである。それで私の頭にあの体験を久遠に話してみようかという考えた。あるいはこの童顔のキカイ探偵ならば、あの男の不可解な態度にも、何か理由を見つけられるのではないかと思ったのだ。

「そうだ久遠君、聞いてくれたまえよ。実は葬儀の帰りに、なんともおかしい様子の男に会ったんだ。あれはいったいなんだったのか、良ければ君の考えを聞かせてくれないかな」

そうして私は電車の中で顔を合わせた男との不思議な一件を久遠に細大漏らさず話して聞かせた。事務所にいる時は間違いなく暇なのだという法則を持つ探偵は、別に嫌がる風でもなく、かといって特別興味が湧いた様子も見せず、私の話に適当に相槌を打ちながら耳を傾けた。

途中、事務所内を掃除という名目の下にドタバタと駆けまわっていた閑子嬢が、ふと窓の外から通りを見降ろした後、

「先生、ちょっと外の掃除に行ってきます」

と言って箒のような細長い物を手に屋外に出てからは、騒音（大げさな物言いに聞こえるかもしれないが、それは読者諸氏がその場にいないからそう言えるのである）もなくなり、話はスムーズに最後まで語ることができた。

聞き終えると、久遠は何やらクスクスと人をからかうような笑みを浮かべてなるほど、と一言口にした。

しかし当の語り手である私には、彼の笑みの理由がよくわからなかった。

「どうだろうか、久遠君。なかなか妙な話だとは思わなかったか

い？」

「そうでしょうか？　ぼくには君の出会ったという男の理由は明白であると思うのですがね」

「えっ、どういことだい？」

私は驚いて聞いた。彼の笑みは、すべての真相を見通した故のものだといのか。

「ある一つの仮定を念頭に入れてみてください。そうすれば男の行動はすべて一本の筋を持って繋がりますよ」

「仮定？　それはいったい……？」

「簡単です。彼はその眼に人ならざる者の——幽霊の姿を見ていたのですよ」

「幽霊だって!？」

私は友人の口から急に飛び出て来た突拍子もない言葉に思わず仰天した。変な話になるが——私としては男こそが幽霊だったと言われる方がまだ納得できた。あの肩を叩かれた時の男の手の尋常ではない冷たさ。あれは確かに死人のそれを連想させるものだった。しかし久遠は男の方が幽霊を見ていた側だと言う。

「では男の立場になって一から考えてみましょうか。ここでは仮に男を太郎氏とも呼ぶことにします。太郎氏はある日ある電車の車両に乗り込み席につくわけですが、彼はそこで車両内にいる幽霊の存在の気付いてしまいます。当然太郎氏は逃げ出したい思いに駆られますが、そこは電車の中、走行中は逃げ出す術はありません。逃げる機会が訪れるまで、せいぜい彼は霊達を刺激すまいと身を縮めて大人しくしています。するとそこにこのこと現れたのが、甲斐君です。さて甲斐君、君は幽霊ですか？」

「僕が実は既に死んでいたんだなんてオチでないのならば、違うと思うけれど……」

「ならば君は人間です。安心していいですよ。さて、ここでまた太郎氏の視点に戻りましょう。自身が幽霊の恐怖に晒される中ふいに現れた新たな人物。もし甲斐君ならそんな時どうしますかね？」

「それは……やっぱり気になって見てしまっただろうね……あつ、も、もしかしてそれで彼は僕のことを不自然に見ていたのだと言うのかい？」

「そうです。それは極めて蓋然性のある推測だと思います。さて、いったい彼の胸に去来する思いはなんだったのか、助けを求める視線だったのか、それとも甲斐君が人間なのかあるいはその場の死せる者と同類なのかと勘繰ったのか、それはぼくにはわかりませんが、いずれにせよそんな状況ならば、太郎氏が君を見つめるという行動は、極めて自然なものだったのです。さて、そうしていたら甲斐君の方から太郎氏に水を向けたとの事。少しの会話をしてみて、太郎氏はその反応で君がどうやら人間であるらしいと判断します。加えて彼はここでもう一つ重要な推測を立てます。それは、甲斐君が自分が見られているその理由を見当づけられていないという事から判断しうるもので、つまり甲斐君には太郎氏の見えている幽霊が見えていないのだ、という推測です」

「そりゃあ見ますよ、そりゃあね」

「ほう、すると、あんたは……ははあ、そういうことか」

ああ、と私は思った。彼のあの時の台詞の意味がようやく見えたのだった。

「この仮説を裏付ける根拠は彼の行動、言動以外にもあります。それは彼の汗ですよ」

「汗？」

「ええ。君は言いましたね。車内は少し肌寒いくらいに冷房が効いていると。そんな中でなぜ太郎氏は汗をかいていたのか。もちろん暑さのためではありません。それは彼が君の肩に手を置いた時、その手が非常に冷たいと感じたことから言うことができます。太郎氏の体は、間違いなく冷房によって冷やされていたのです。ではその状態で彼はなぜ汗などかいたのか。答えは冷や汗ですよ。極限の

緊張と恐怖が、太郎氏に不自然な汗をかかせたのです。さらに同様の推理は彼の表情からも立てることが出来ます。甲斐君は太郎氏がずっと口角の片方だけを吊り上げる奇妙な笑顔を作っていたと言いましたが、果たしてそれは本当に笑顔だったのでしょうか？話を聞くとところによると、彼はその後にはるかに妙な音を出して笑った、と言います。と言うことはその時の太郎氏の表情こそが彼の笑顔であって、それ以前の表情は笑っていたわけではなかったのです。すると甲斐君が厭な表情だと評したそれはいったいなんだったのか。ぼくは唇の片方だけを吊り上げるような、そんな表情に一つ覚えがあります。こうは考えられないでしょうか？彼はずっと恐怖に顔を引きつらせていたのだ、と」

「なんてことだ……。確かに、確かにそうだ」

私は久遠の言葉に茫然自失とするしかなかった。今のところ、男の行動はすべて納得いく説明がされていた。

「君に幽霊が見えていないのだと考えた太郎氏は、ここで一つ幽霊の手から逃れる術を思いつきます。それは、何も知らぬ甲斐君に幽霊を押しつけてしまえないだろうか、という考えです。幸い甲斐君は呑気に終点まで行くのだと言う。だったら自分はさっさと電車から逃げ出してしまうえば、助かるのではないかとそう思ったわけです」

「そうか。それで彼は急に余裕のあるような態度になって、そして早々に次の停車駅で降りたのか」

「そうです。しかしここで太郎氏にとっての大きな誤算が発生した。自分だけ霊の手から逃れようと降りたのに、その霊達もまるで自分を追いかのように電車を降りてきたのです」

「それは……どうしてそんなことがわかるんだい？」

「どうして？　だって君は言ったではないですか、ホームに降りた男は、振り返ると驚愕に目を見開いていたのだと」

「あっ」

「そうか、と言うことは――」

「あの瞬間は彼は僕のことを見ていたわけではなかったのか」

「そうなりますね」

なんということだろう。久遠の説明により、あつという間に男の奇行はすべて奇行ではなくなってしまった。私は深く息を吐くと、ソファに大きく体を預けて天井を仰いだ。同時に問題の男の姿も私は思い浮かべた。久遠の話が本当ならば、彼は今頃幽霊に取り殺されてしまっているかもしれない。同情してやる義理はないが、ともすると私も幽霊列車に乗り合わせていたわけで、あまり他人事のよきに気軽に考えられるものではない。

と、感心しかけたところでいや待てよ、と私の脳裏に浮かぶ考えがあった。久遠の説には、一つ大きな欠陥があることに気付いたのだ。その欠陥が説明されない限り、これで万事解決と手を叩くことはできない。

「久遠君、僕はまだ一つ重要な説明を受けていないぞ」

「なんででしょうか？」

「君の説は、君自身が初めに言ったように、ある一つの前提の上に成り立っている。それは『列車の中に幽霊がいた』という前提だ。その前提が正しいことだと認められない限り、君の考えもまた空論に過ぎないぞ」

私としては、なかなか痛い所を突いたつもりであった。それだから、てっきり彼の珍しい困った顔が見られることを期待したのだが、現実はそうではなかった。久遠は私の言葉尻、少し虚を突かれたような意外そうな顔をしてみせたが、すぐにそれは消え、代わりに呆れたように苦笑してみせた。

「ぼくはてっきりもう君自身で気付いているものだと思ってましたよ」

「え？　なんだいそれは？　いったどういう……」

「ではいくつか質問しましょう甲斐君。もう陽も傾きかけた夕刻の時間帯、田舎町から都心に出る上り列車の車内がどうして座る場所もすぐには見つからぬ程に混んでいたのでしょうか？」

あつ、と私は声を上げた。

「そしてそれ程混んでいたにも関わらず、どうして車内は走行音以外何も聞こえないような静寂に満ちていたのでしょうか？ どうしてそれだけの乗客がいながら話し声の一つもなかったのか？」

——そうか、そういうことだったのか。

人ならざる者はずっといたのだ。しかも、私の目の前に。

「極めつけは君が居眠りから目を覚ました瞬間です。君は車内に流れる、駅の到着アナウンスで目を覚ましたと述べました。と、言うことは、その瞬間は車両が駅に滑り込んだ直後のはずであるのです。だと言うのに、君が咄嗟に辺りを見回しても車内にも、そしてプラットフォームにも、乗客の姿は一人もないと言う。席を埋め尽くす程の乗客の姿はいったい何処に消えてしまったのでしょうか？ まさかそれ以前の駅で、君を残して全員降りてしまったのか？ 果たしてそんなことがあり得るのでしょうか？」

あの電車に乗っていた、私と男以外のすべての者が、この世の間ではなかったのだ。

私は思い出す。そして、今さらにやっと身震いする。どうして気付かなかったのか。何も疑問に思わなかったのか。

車両を埋め尽くす無数の人影が、皆一様に言葉一つ発せず俯いていたあの異様な光景を。

「僕が今こうして呑気に話していられるのは大変な幸運なのかもしれない。僕は今頃、あの幽霊達に黄泉の世界に連れられていても不思議ではなかったわけだ」

私は言った。

「それはまあぼくにはなんとも言えませんがね。話だけでは、君の遭遇したものが人に害をもたらす悪霊であったかどうかともわかりませんし」

「いや、彼らは悪意ある靈魂達だった。今ならわかるよ。あれらは確かにそういう気配を持っていた。だからこそ、あの男もあれ程に

恐れていたんだ。なんとなくだが、彼はもうこの世にはいないのではないかという気がするよ。どうしてぼくは助かったんだろうか？
なんでこうピンピンとしていられるんだろう」

「さあ、それもぼくにはわかりません。何か心当たりはないのですか？」

「心当たり……」

ふと、頭をよぎるものがあつた。

私は悪霊達の魔の手から護った何か。それは、考えるに“あれ”しか思い浮かばなかった。私は少し震える手でズボンのポケットを漁った。効果など一片も信用せず、ただ少しでも姉の涙を軽減することができのならばと受け取ったそれを。

幸人の生前、彼の傍にある時その幼い命を護っていたという薄茶色の御守りが、掌にはあつた。

「御守りですか？　なかなかご利益がありそうですね。大事にする
と良いでしょう」

久遠は言った。

私はそれに返事も出来ず、頷くことも出来ず、ただ様々な思いを胸に御守りを見続ける。

「あれえ？　先生達、なんだかしんみりしてますね。しんみり病ですか？」

と、私の背後で外に出ていた閑子が扉を開けて室内に戻ってきた。
久遠はそれを見やると言った。

「大したことじゃありませんよ。それより外の掃除は終わったのですか？」

「はい。なんか甲斐さんにくつついて、変なお化けがたくさん表まで来ていたので適当に掃除しておきました」

探偵助手の少女はあっけらかんとんでもないことを口にした。

見ると、彼女が持ちだした箒のような細長い者は、箒ではなく鋭利な刃のついた薙刀だった。

了

怪ノ三 『人間になりたい』

わたしはお人形さん。名前はまだない。

もう長い間ずっと待っている。誰かがわたしのお友達になってくれないかなあって。

だってわたしはお人形だから。一人じゃ動けないし、言葉も喋れない。誰かに遊んでもらって、やっとその時初めて価値を持つのだ。それまでは、わたしはその辺に転がっている石ころみたいになんの意味もない存在。

誰かがわたしの視界に入る度にいつも心の中で叫ぶ。特にその人がお人形が好きそうな女の子だったらもう必死。

お願い、どうかわたしをあなたのお家に連れて帰って、って。

わたし、とっても可愛いなのよ？ お目々がぱっちりまん丸くて、お肌もすごくすべすべで綺麗。髪の毛だってつやつやしててさらさら。わたしなら、絶対あなたの素敵なお友達になれるわよ、って、そんな風に思うの。

だけど結果はいつも残念。みんなわたしの顔を覗きこんでくれて、頭もなでなでしてくれるけど、それだけ。だあれもわたしを貰ってくれない。

あーあ、どうしてなのかなあ。

こんな毎日が続くとなんだか自信もなくなっちゃう。わたしはあんまり素敵なお人形じゃないのかな？ 世の中にはもっと可愛いお人形さんがいっぱいいて、みんなそっちの方が好きなのかな。

なんて、落ち込んでいたら、ついにある日わたしを貰ってくれる人がやってきた。

その人は以前から時々わたしを覗に来てくれるおじさんだった。おじさんは、わたしの今の持ち主と長い時間話した後、わたし

を抱き上げて自分の車に乗せた。

おじさんはわたしに優しく微笑んで言った。

「さあ、行こうか」

やっとわたしを貰ってくれる人が現れた。それは嬉しい。でもちよつとがっかり。どうせならわたしは、人形を飾って眺めて楽しむ大人の人よりも、多少汚れたり傷ついたりしてもいいから、仲良く遊んでくれるような子供に貰って欲しかった。

でもあんまり贅沢は言わない。どんな人であれ、こうしてわたしを気に入って貰ってくれたような人の所なら、少なくとも前の持ち主の下にいるよりはきつと幸せなはずだから。前の持ち主は、わたしを白い壁の倉庫に入れっぱなしにしたまま全然構ってくれなかった。だからわたしは、ずっと一人ぼっちで寂しかった。

わたしはお人形だから、時間の感覚が曖昧でいたいどれくらい車に揺られていたのかってことはよくわからない。それでも、もうそろそろ退屈だなんて思った頃に――つまり、結構時間が過ぎたんだろうなって時に、車はようやく目的地のおじさんの家についた。

おじさんの家は、なんだかおとぎ話にでも出てきそうな洒落な洋館だった。それで、わたしはこれからの生活にちよつと期待しちゃう。人間から見れば、少し豪華な一戸建てって感じなのかもしれないけど、お人形のわたしから見たらそこはまるで西洋のお城みたい。

お姫様になった気分でワクワクドキドキ。わたし、おじさんに貰ってもらって良かったかも。

だけどそんなわたしの期待はすぐに泡みたいに弾けて消えてしまう。

わたしはてつきりおじさんはアンティーク人形か何かの収集家で、家の中には綺麗なショーケースがいっぱいあってたくさんのお人形がそこに飾られているんだ、って勝手に思っていた。おじさんからは、なんだかそういう雰囲気を感じたから。

でもそんなことはなかった。おじさんが玄関の扉を開けて家の中

に入っても、どこにもお人形の飾られたショーケースなんてなかった。それどころか、外から見た家はお城みたいにお洒落だったのに、いざ扉を潜るとそこはなんでもない庶民的なお家だった。わたしはまたがっかりする。なあんだ。

だけどすぐにもつとがっかりすることが起きてしまう。おじさんはわたしは抱きかかえたまま、真っ直ぐ階段を上って二階へと行く。そこで扉の一つを開けると、変に薄暗くて人の気配がない部屋にわたしをひよいと置いてしまう。

え？ 待って、どういうこと？ こんな所にわたしを置き去りにしないで！ もっとみんなに観てもらえる場所に飾ってよ！

そうやって叫ぼうとした。でもわたしはお人形。声なんて出ない。おじさんはわたしの頭を優しく撫でて、そして微笑むと、くると踵を返して部屋から出ていこうとした。

ねえ待って！ わたしを一人ぼっちにしないでよ！ もう寂しいのはやだよ！ おじさん！ おじさんったら！

ボタン

でも扉は閉じられてしまった。

わたしは無性に悲しくなる。もし人間だったらきつとメソメソ泣いてしまう。だけど幸いなのかなんなのか、わたしが涙を流すことはない。わたしはお人形だから。

そうして時間が進む。どれぐらい、って言うのは、やっぱりわたしにはわからない。ただずっと悲しくって、気分は落ち込んでいた。そんな時だった。

「マリー？」

声がした。

一瞬空耳かと思った。わたし以外、部屋の中には誰もいないと思っていたからだ。けれども再び声はした。

「マリーなの？」

同時にわたしの顔を覗きこむ小さな女の子の姿が視界に入る。声は女の子のもので間違いないようだった。女の子はその大きな瞳で

まじまじとわたしの顔を見つめると、突然飛び上がって歓声を上げた。

「マリーだ！ やっぱりマリーだ！ お母さん、お父さん、マリーが帰ってきたよ！」

マリーって誰だろう？ わたしがそう疑問に思っている間に、女の子に続いてさらに二つの見知らぬ顔がわたしの前に現れた。多分彼らが、女の子の『お母さん』と『お父さん』なのだろう。

二人はわたしを少し観察すると、驚いた風にして互いに顔を見合わせた。

「信じられない。お父さん、この子の言うとおりね、本当にマリーが帰ってきた。わたしもうてつきり二度と戻ってこないものと思ってたわ」

「ああ、僕もだよ。幸太郎君が気を効かせてくれたのかな」

「ええ、でも……なんだか何か少し変ね」

お母さんはわたしの頬をさすりながら言った。

「それは、多分……」

口を開きかけるも、ちらとお父さんは嬉しそうな様子の女の子を言葉をつぐむ。そうしてその代わりにアイコンタクトでもするように目線だけをお母さんと合わせた。お母さんはそれで何か伝わったのか、ちよつとだけ哀しそうにして、納得した様に頷いた。

女の子はそんな背後の両親の様子には全然気付いていない。

わたしはなんとなく事情を察しつつあった。女の子はわたしのことを『マリー』と呼ぶ。そして『帰ってきた』と。でもわたしはマリーじゃない。まだ名前もなくて、お友達もいなかった寂しいお人形。このお家に来るのももちろん初めて。

と、言うことはだ。女の子はわたしをそのマリーというお人形だと勘違いしているのだ。多分だけど、『マリー』というのは以前に女の子のお友達だったお人形の名前。でもどうした理由からなのか、女の子はマリーをどこかに失くしてしまったのだ。そんなところにあのおじさん——きつとあの人『幸太郎君』で、マリーを失くし

てしまつて悲しむ女の子の為に、マリーによく似たお人形を、つまりわたしをこっそり貰つてきたのだ。

お母さんが『変だ』と言つたのは、わたしはいくらマリーに似ていてもマリーじゃないからだ。お父さんが口ごもつたのはわたしをマリーだと思い込んでる女の子の前で、本当の事を言えないと思つたからなのだ。

そうすっかり理解すると、わたしはなんだかとっても複雑な気持ちになる。言ってみればわたしは所詮“マリーの代わり”に過ぎなくて、女の子が本当に大切にしているのはわたし自身じゃない。そりゃあお友達として遊んでくれるような人に貰われたい、っていうのはわたしの希望だけど、なんだかどこかで一人寂しさに心震わせているかもしれない本物のマリーちゃんに対してちよつと罪悪感。

そんな風に色々考えてたけど、次の瞬間そんな逡巡は一瞬で吹き飛んでしまつた。

女の子はぎゅつとわたしに抱きつくと、顔いっぱい、ひまわりみたいに明るくて素敵な笑顔を浮かべて言つたのだ。

「マリー、お帰りなさい！　また一緒に遊ぼうね！　もうどこかにいなくなっちゃ駄目だよ！　これからは、ずっとずっと一緒だよ！」
わたしはこの子となら、他の誰に貰われるよりも、楽しくて素敵な毎日が送れるんじゃないかと、そう期待していた。

その日から、わたしと女の子の新しい日々が始まつた。

女の子は自分のことも『マリー』と呼んだ。あれ、お人形のマリーちゃんと一緒の名前なの？とわたしは最初不思議に思つたけれど、遊んでいる内になんとなくその辺の事情がわかってくるようになった。女の子、つまりマリーは、大切にしていたお人形に、自分と同じ名前をつけて、リトル・マリー小さなマリーちゃんと呼んで可愛がつているようだった。

なんだかちよつとややこしいけど、わたしはマリーじゃないからこれからずっと『わたし』、女の子のことは『マリー』と呼ぶこ

とにする。

マリーはわたしが第一印象で感じたように、やっぱりとびきり素敵でキュートなお友達だった。お人形のわたしに、人間の女の子に接するみたいに自然に話しかけてくれたし、遊んでくれた。お人形遊びをする時、わたしはいつもマリーの子供の役。“お母さん”のマリーは、そんなわたしの面倒をととても優しく見てくれる。マリーはそれでわたしのことを可愛いね、ってなでなでしてくれるけど、わたしから見たらそんなマリーの方こそがとっても可愛いんだ。

マリーはすぐ天真爛漫で、お茶目さんで、何よりわたしを大切にしてくれる気持ちがひしひしと伝わってきた。

わたしは今ではマリーに貰われて本当に良かったと思っている。わたしはもしかしたら世界で一番に幸せなお人形かもしれない。大げさかもしれないけど、本当に、そんな風に思えるんだ。

でも、どうしたのだろう。遊んでいる内、ふとマリーの様子に陰りのようなものが見える時が段々に出てきた。どうしたのかなと思うけど、わたしにはその理由はわからない。

ある時マリーはお父さんの袖を引っ張って、部屋の隅でまるでわたしに聞かれないようにでもするかのようにコソコソ話をした。

内容はもちろん気になるけど、わたしは動くことができないからこっそり近寄って聞き耳を立てることもできない。

話を終えると、マリーはわたしの方へと近づいてきた。なんでなのか、その顔はなんでだかまるで今にも泣きだすみたいにくしゃくしゃに歪んでいた。

「マリー……早く元気になってね。あたし、マリーが元気になるまですっと待ってるから。ずっとお友達だから」

わたしはまったく意味がわからなかった。

どういうこと？ マリー、わたしは元気だよ。どこも悪くないよ。だから泣かないで。そう言いたかったけど、やっぱりそれが言葉になることはない。

いったいなんなのだろう。もしかして、わたしが病気になっちゃ

ったって、そういう設定でしばらく遊ぶのかな？ でもマリーの様子はとても真剣で、とてもごっこ遊びをしているようには見えない。しばらくすると、マリーは普段のマリーに戻った。けれど時々、ふとわたしを心配するような、そんな顔をした。

わたしは日々のお大半をマリーと共に過ごした。だけれどももちろん、マリーにはマリーだけの時間もあるわけで、彼女と遊んでいない時間もあった。そういう時、たまにわたしをマリーの家まで連れてきたおじさん――多分幸太郎って人が、わたしの様子を観に来ることがあった。幸太郎がわたしと一緒にいる時間は長くない。だいたいいつも、少しわたしを見つめて優しく微笑んで、頭を撫でてくれて、そうしたらちょっと何かわたしの見えない所でした後部屋を出ていく。

よくわからないけど、なんだか幸太郎もわたしのことをずいぶん気にいってくれてるみたいだった。もしかしたら本当に、あの人はお人形の収集家か何かだったのかもしれない。本当はわたしのことも自分が欲しかったのだけれど、マリーのことを思ってたか、彼女に譲ってあげたのかもしれない。その証拠に、幸太郎はいつも狙ったみたいにわたしがマリーと遊んでいない時にやってくる。きっとそれは、彼なりのマリーに対する気遣いなんだろう。

わたしは少なくとも、マリーと幸太郎、二人の人にとっても愛されているみたい。なんだかちょっと照れくさくて、でもすごく嬉しい。

ゆるやかで、穏やかな幸せな日々。わたしはずっとこんな時間が続けばいいと思った。マリーと一緒になら、それも夢じゃないと感じていた。だけど、

突然に、そんな時間は終わりを告げた。

暗い真夜中だった。

わたしはなんだか無性に眠たくて、まどろむような気分でぼんやりと暗い部屋の中を見つめていた。そこへ、ぬっと三つの人影が現

れた。

お父さんと、お母さんと、マリーの三人だった。

三人ともなぜだかすごく悲しそうな、やるせないような表情を浮かべていた。

「よく聞いて」

お父さんが言った。

「大変に重要な話をしなければならぬ。君に僕の言葉を聞いているかはわからないけど、話しておくことにするよ」
聞けてるよ。

わたしは心の中で応えた。深刻そうな様子だったが、ひどい眠気に襲われていたわたしは、この時点ではまだあまり三人の異様な様子を、そう認識することができていなかった。

事の大きさに気付いたのは、お父さんの次の台詞だった。

「わたし達三人は、今夜この家を出ていく事に決めた」

——え？

「だけど、君は連れていけない」
どうして？　なんで？

「もちろん、君には悪いと思っている。こんな事は当然本意でもない。だけど慎重に考えて話し合った結果、そうする他はないと思っただ。僕達、家族の幸せの為にそれが最善だと」

待って！　お父さん、どういうこと？　そんなのやだよ！　わけわかんないよ！

「君を連れていければどんなに良いと考えた事か……。マリーもそれを願っていた。けどそれはあらゆる事情が許すことはないんだ。よしんば可能だったとしても、それは結局僕達にとっても、そして君自身にとっても良いことじゃない。だから……。今日でお別れだ」

嫌だ！

そう叫びたかったけど、それは叶わない。

わたしは救いを求めるように、マリーの方を注目した。

マリー他の誰よりも悲しみに満ちた顔をしていた。今にも涙が溢

れかえるかのような、そんな様子だった。

「マリー……マリー……ごめんねマリー。ずっと一緒だって約束したのに、約束守れなくて、本当にごめんね……」

絶望に、包まれた心地がした。

マリーならきつとこんな事、わたしだけ置いて出ていくなんて、絶対反対してくれると思ったのに。泣きそうになりながらも、マリーもまたそれを納得しているなんて。

ひどい。

ひどいよ。どうして？　なんで？　約束したのに、それなのに、どうしてこんなわけのわからないままにお別れなの？　嫌だよ、そんなの嫌だよマリー。これからも一緒にいようよ。もっと遊ぼうよ。なんで家を出ていくの？　どうして出ていかなきゃならないの？　どうしてわたしは連れていけないの？　ねえ、どうして？

……もしかして、わたしが小人形だから？

わたしはマリー達と違って人形だから？　だから駄目なの？　どうせわたしは人間じゃないから、生き物じゃないから。結局はその辺の石ころと変わらない、ただの“物”だから、だからわたしは置いていっちゃうの？　ねえ、教えてよ、お父さん、お母さん。ねえ、マリー！

そんな必死の懇願も、心の中で思うだけでは伝わらない。やがてゆっくりと、名残惜しそうに三人はわたしに背を向けた。そうして月光降り注ぐ、家の中と外を結ぶ境界に立つ。

一人ずつ、最後に別れの挨拶の代わりであるようにわたしに寂しそうな、しかし見慣れた優しい視線を送る。

まずはお母さん。

次にお父さん。

そして最後は——マリー。

「さようなら」

マリーは言った。

そしてその小さな背中が、煌々とした満月に照らされた、夜の世

界へと消えていった。

部屋にはわたしだけが残された。

涙がこみ上げる思いがした。

人形だから、涙なんて流れないけど、それでも何かが目から零れおちるような、そんな錯覚をした。

そう、人形だから――

人形だからいけないのだ。

もしもわたしが人間だったら、この手足が動いたなら、声が出せたのなら、わけがわからずとも無理やりにもマリー達を引きとめることが出来たかもしれない。すがりつくことができたかもしれない。

いや――そんな“もしも”は無意味だ。

わたしは人形なのだから。そして人形である以上、遅かれ早かれ、形はどうあれマリーとの別れはやってきたはずだ。

マリーは成長する。いつまでも人形遊びをする女の子のままじゃない。

いつかはわたしは飽きられる。

そうしてマリーとは“お友達”ではなくなる。
そうだ。

初めからわかっていたのだ。

『ずっとお友達』でなんていられるわけがない。
人間と本当の友達になれるのは、同じ人間だけだ。

どれだけわたしが気に入られたとしても、結局それはお人形遊び。友達ごっこでしかないのだ。

わかっていた、全部。

わかっでいて、それを認めたくなくて、淡い期待ばかり抱いて自分を誤魔化していた。

遊んでくれるお友達が欲しい、なんて、結局それはそんな嘘っぱちの願い。

わたしの願いはただ一つ。

人間になりたい。
それだけだった。

自分の意思で動き、自分の意思で言葉を発したかった。もう一度あの世界に、マリーが旅立った広い世界で自分の意思で生きたかったのだ。

叶わないことは、わかっている。けどそれならばただ、願うだけでも――。

眠ろう。

そう思った。

相変わらず眠気がひどい。こんなこと、今まで一度もなかったのに。

でも好都合だった。このまま眠って、すべてを忘れたかった。

自分が人形であることも。――マリーのことも。

あるいはそうして目を覚ませば、今の嫌な体験は全部夢だったとわかるかもしれない。目覚めれば、またマリーがいて、お父さんがいて、お母さんがいて、あの幸せな日々が始まるかもしれない。

そんな願望は気晴らしでしかないことはわかっているのだけれども。

それでもわたしは眠る。

その胸に、たった一つの願いを抱えて。

人間になりたい、と。

「はあ……」

私が深く溜息をつくと、相も変わらず暇そうに紅茶を啜っていた久遠が目ざとく反応した顔を上げた。普段の探偵ならば、例えば私が彼の事務所の勝手に上がり込んで何をしよう、溜息をつこうが笑いだそうが泣きだそうが、仮に裸踊りをしていても、こちらから彼に話しかける意思を見せない限り、徹頭徹尾無関心を貫くというのに、今日に限ってその法則を破ったのは、ひとえに彼が

普段以上に暇を持て余していた故であった。

なんだかんだで久遠の暇つぶしの相手になる閑子嬢も今日はいない。なぜいないのかは知るところではないが、別におかしな事でもない。普段酒を飲まない私が時に付き合いで酒を含むことがあるように、基本暇人の久遠が時に忙しく働くこともあるように、毎日探偵事務所にいる閑子が事務所にいない時だってあるだろう。

そんなわけで、久遠は私の落ち込んだ様子に、何らかの暇つぶしの匂いを感じて取ったのか、あえて気のない風を装って私に尋ねた。「どうしたんですか甲斐君。何やらずいぶん気が沈んでいるようですが」

私がこうして久遠の事務所を訪れたのは、もちろんその沈んだ気持ちに紛らわす為である。ここにいれば、少なくとも常時両隣の部屋からカップルのいちゃつく声と怪しい独り言が聞こえるアパートの自室よりは落ち着けると思ったからだ。（と言うか、私がしょっちゅう用もないのに久遠の元に来る理由は大部分その辺りに由来するところもある）

なのにこうしてつつこまれる様では、その目的も果たせない。一瞬無視しようかとも思ったが、しばし考えた後私は話すことにした。それと言うのも私の溜息の理由たる事態に関して、一つ彼好みの妙な出来事が絡んでいたからである。久遠に話して、その真相がわかるならばと、私は自分の好奇心に態度を任せることにした。

「うん、まあね。実は昔の友人の一人娘が亡くなったみたいでね。人づてに聞いて、葬儀に出席したわけでもないし、その友人に会いに行くつもりもないんだけど……この前の甥のこともあるし、こう身近で不幸が、しかも若い命が亡くなっていくのはなんともやりきれないと思ってね」

「そうですか。それは残念なことです。しかし死せる者の魂を蘇らすことはばくとて……いや、誰とて不可能なことです。残されたばかりには故人の冥福を祈る以外できることはありません」

「うん、そうだね」

「さて、それで？」

「……『それで』とは？」

「何かあるのでしょうか？ 『キカイ』たる何らかの出来事が」

見透かしたような瞳でこちらを見やる久遠に私は苦笑するしかなかった。どうやら私の考えはすべてお見通しであるらしい。

「うん、まあその通りだね。ちよっと一つ不思議な事があって。：

…実はね、人形がなくなったと言うんだ」

「ふむ、人形が。と言うと？」

「うん、順を追って話そうか。亡くなった友人の娘はその名前を真理ちゃんと言ってたね。小学一年生だったんだけど、人形遊びがとても好きな子供だったんだ。彼女には特にお気に入りのお人形があった。それは『お父さん』と『お母さん』と『娘』が三つにセットになった人形で、真理ちゃんはこれをたいそう気に入って、特に女の子のお人形にはリトル・真理と、自分と同じ名前をつけて、まるで本当の友達みたいに可愛がってた。しかしある時悲劇が起きた。真理ちゃんは下校途中に交通事故に合って重傷を負い、そのまま長い昏睡状態に陥ってしまったんだ。つまり、植物人間だね」

「ふむ。それは確かに悲劇ですね。それで？」

「それで真理ちゃんはしばらく病院に入院してたんだけど、医者にもうこのまま彼女は一生意識が戻らず、ただゆるやかに死を待つしかないと言われた幸太郎は……ああ、『幸太郎』ってのは、僕の昔の友人で真理ちゃんの父親なんだけど、とにかく彼はそれならば娘を住み慣れた家にいさせてやりたいと思って医者への許可を取って自宅に連れ帰った。そうして幸太郎は、娘を好きだったリトル・真理の人形がある、彼女の自室に寝かしたんだ。……そしてその三カ月後、真理ちゃんは自室のベッドである朝眠ったままのように冷たくなっていた」

「三カ月、ですか。幸太郎氏は延命治療は……」

「放棄していた。このまま人形のような生が続くならばいっそ安らかに、と彼は思ったらしい」

「ふむ。その選択の是非は……ぼくらの論ずるところではありませんか」

私と久遠はしばし沈黙した。

この時友人が何を考えていたかは当然わからない。ただ私に言い伝え、自分で言葉にしながら、なぜこうも若い命が不条理に奪われる現実があるのかと、その世の無情さになんとも言えない虚しさを感じていた。

「して、彼女の身に起きた不思議な事とは？　今のところ特に気になる点はありませんが」

「ああ、そうだったね」

それで私は当初の目的を思い出した。

「実はね、不思議な事に、真理ちゃんが亡くなった朝、幸太郎が彼女の部屋に行くと、彼女の大切にしていた三つの人形、リトル・真理と、『お父さん』と『お母さん』、それらが綺麗さっぱり消えてしまっていたんだ。幸太郎は奥さんと離婚していて、その晩家には真理ちゃんと幸太郎の二人しかいなかった。幸太郎は人形を持ち出したりなんてしてないし、もちろん指一本動かさず意識もない真理ちゃんに人形をどうにかするなんてのは出来っこない。奇妙だったのは、部屋の窓の二か所が開いていた事だった。窓はクレセント錠で全部内側からしか鍵の開け閉め出来ないタイプで、昨晚確かに施錠状態にあったことを幸太郎は確認していたと言う。どうだろう？　妙な出来事だと思わないかな。部屋は人形が無くなった以外昨夜と同じ状況で空き巣の犯行には見えないし、第一鍵のかかった窓からどうやって侵入したのかその方法が謎だ。まるで、現場の状況だけで判断すると、その……」

「判断すると？」

「人形が自分で窓を開けて外に出ていった。そういう風に取れないかい？　まさか人形が意思を持つだなんて、そんなこと信じられないけど、今のところそれ以外説明をつけることができない。久遠君、君はいったいどう思う」

「ふむ……」

久遠は中空を見上げると、少し考え込むようにして鼻の頭を掻いたりした。

しかしそう長くもしない内にその手を止めると、なんだかまるですっかり考えることを投げ出してしまったみたいになって、最初そうしていたように紅茶を啜り始めた。

私ほもどかしく思っ、聞いた。

「久遠君。何かわかったのかい？」

「さあ？ さっぱりわかりませんね」

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5116w/>

キカイ探偵久遠虎次郎

2011年10月4日03時30分発行